

I-B 『オ레스ティア』における複合語の形容語句の用法

アイスキュロスは難解な悲劇詩人であると言われている。彼の作品が難解であるのは、劇で用いられている語彙の中に、日常の語法とは異なる詩人独自の表現が多いためである。彼のこの傾向は古典時代においてすでに「大仰で難解な表現を好む」と批判され揶揄の対照となっていたが、この特徴は時間と背景がはなはだしく隔たった現代の文化にこの劇を移入しようとする時に大きな制約となる。

彼の作品の難解さは複合語が新奇な組み合わせで構成されているために、その形容がただちには理解しがたい点にある。詩人はギリシア悲劇が急速に発展し成熟していく時期に活躍し、上演方法や舞台装置など視覚上での表現方法に新案や工夫を取り入れて、その形式を豊富に多様に整備した。中でも彼は演劇の言語表現に力を入れ、悲劇の形式にふさわしい修辞方法の創出に意を用いた。その解答のひとつが複合語による新しい形容語句と比喩を用いた独特の言語表現である。日常に使い古された陳腐な言い回しも、新たな舞台展開の中で異なった言葉の組み合わせによる創意に富んだ比喩として使うなら、その響きによって観客の心に「新鮮な驚き」を与えることができる。しかしそれが新鮮に響くか、単に「新奇ではあるが意味不明」な言葉の羅列に終わるかは詩人の力量によると言えよう。

ギリシア悲劇は神・英雄・人間という異なる次元の世界に住み、世代を隔てて生きる者たちを同じ舞台に乗せ、時間の経過と場所を凝縮して物語を展開させていく。三部作はこの目的に適った劇形式であり、各々が共通の主題を扱いながら舞台を転換させることによって異なる時間と場を限られた狭い空間に設定することができる。しかし舞台という限定された場所にこの壮大な時空を展開させるためには、視覚にのみ依存して目の前にある舞台装置や劇場設備に頼るだけでは不十分である。

アイスキュロスは世代と次元を隔てるこの障壁を想像の飛躍力で跳び越え、異なる世界にまたがる物語を狭い舞台に繰り広げ、神と人とが自由に行き交う空間を作り出した。俳優の動作が緩慢で舞台装置が簡潔な能舞台にも広い多様な空間が出現するように、アイスキュロスは詩人の能力を生かし、言葉の豊かな表現力を駆使して観客の想像力に訴えかけた。言葉の多様な表現力を動員して多彩な世界を観客の脳裏に織り成し、それを舞台の上にも彷彿として現前させるように工夫した。

彼が駆使したのは既成の語彙や慣用語に止まらず、通常に使われている言葉を新たな発想で組み合わせる複合語による形容語句であった。それらの形容語句を細かく分析してみると、語句の組み合わせの中に比喩が内包されていることに気付く。比喩は舞台の外や登場人物の心の内面など観客の眼には見えないものを雄弁に描き出し、舞台装置や衣装・小道具など同様に演出上の効果を生み出している。詩人は物語の展開状況が要求する表現を既成の言葉に求めず、必要に応じて自由に言葉を繋ぎ合わせて修飾語を作り上げ、その意表を突く新奇な発想によって大いに舞台効果を高めた。しかしそれらは人々の耳になじんだ成熟した慣用語句ではないために、聴衆に素直には理解されず「大仰で難解な表現を好む」と詩人が批判される原因ともなった。アイスキュロスが登場したのは、演劇の急速な成長の過程にあって舞台演出上のさまざまな実験が行なわれ、言葉の表現の上でも各種の試みが行われた時代である。彼が考案した複合語の形容がどれだけ適切で効果的であるか、その比喩的な表現がどれだけ成功しているかを個々の用例に当てて検討してみよう。

本文では E.R.Earp: *The Style of Aeschylus* の中の複合語の表を参考にして筆者が作成した用語一覧を基に作品の流れに沿って用例を分析する。用例の中の複合語は「」で囲み、引用箇所の番号を記し、ギリシア語の音訳も併記してある。比喩だけの引用にはギリシア語の音訳は併記していない。それらの複合語を辞書の訳語を絶対の拠り所にせず、構成要素の本来の意味に帰って、新しい言葉の組み合わせから生ずる意味が自然に把握されるように解釈し直した。その表現が新鮮で理解しやすく成功しているかどうかを個々の場合に即して考えていきたい。

I - B - 1 『アガ멤ノン』

前書き

『アガ멤ノン』は『オレスティア』三部作の第一部の劇である。これはアルゴスの王家アガ멤ノンの一族の祖アトレウスの近親殺人に端を発する同族殺しの伝説に取材した作品である。三部作という構成は同一の物語に基づいていても、各作品の時代と場所、登場人物と主題は自由に設定できるから、長大な物語を様々な視点から描き出すことができる。第一部は時代をミケーネ時代に遡り、十年にわたるトロイア戦争の末期を背景にしたアルゴスにあるアガ멤ノンの城館の前に舞台に設定している。

この劇の表向きの主題は王妃クリュタイメストラによる夫殺しであり、その動機は長女イーピゲネイアを出陣の儀式のために犠牲として奪われた王妃の怨念である。この劇の中でもアトレウスの同族殺しは取り上げられているが、それはこの一族の陰謀を謀み復讐を好む陰湿な体質を描暗殺計画の雰囲気盛り上げるために使われている。王暗殺を実行した後に登場する王妃の愛人アイギストスもこの事件に言及しているが、それは自分の責任逃れの弁明として用いているように響く。

しかしこの劇の本質的な主題は「罪無き者の死」である。それは出陣の儀式のために騙されて家から連れ出されて犠牲に捧げられた王女イーピゲネイアの死であり、またトロイア滅亡の後に捕虜として連行されアガ멤ノンの愛人として悲運を共にした王女カッサンドラの死である。だからこの二人の死の有様はコロスが関わって舞台上で入念に描写されている。イーピゲネイアの場合はアウリスに集結したギリシア軍の船団が逆風に出航を阻まれその原因をカルカスが王にありと占い解き、王女が犠牲に捧げられるまでの経緯をコロスが「ゼウスの讃歌」を挟んで長々と歌う。カッサンドラの場合は舞台上に一人残された彼女がアポロンの憑依によって狂乱し、コロスとの問答によって自分の哀れな最期を物語る場面である。

そしてこの両者の死の背景にあるのはさらに多くの「罪無き者の死」である。それはヘレネーとパリスという二人の無思慮な行為のために、あるいはそれを口実にしたアガ멤ノンとメネラーオス兄弟の野心のために無駄な死に追いやられたトロイアの民とまたギリシア軍の兵士たちの死である。舞台上に華々しく登場するアガ멤ノンとクリュタイメストラという主役の陰で、空しく滅びていった無数の罪無き者たちに詩人の視点は向

けられている。だから王暗殺という主要な事件を劇の終わりに置いて、その前に 1300 行あまりも用いてこれらの犠牲者たちの死の有様をコロスが歌い上げるのである。

またこの三部作で劇の登場人物が一貫して主張する行動理念は「正義」の思想である。アガメムノーンはゼウスの掟を破ったパリスを正義の名のもとに罰し、クリュタイメーストラは娘の正義にかけて夫を討ち、アイギストスは父の無念を晴らすために王妃に助力する。しかしこれらの正義の名目が単なる私怨を晴らす報復の口実として用いられ、それが次の報復行為を準備する。この限りない報復合戦の狭間に「罪無き者」が犠牲となり無用の死を遂げることが真の悲劇といえよう。複合語による形容がその効果を示し豊かな描写力を発揮するならば、それはまさに上に述べた場面においてであろう。「アガメムノーン」の劇の筋を追ってそれぞれの場面における複合語の用法を改めて見直してみよう。

プロロゴス（1～39）

場景はアルゴスのアガメムノーンの王宮の屋上にある見張り台である。王のトロイア遠征中の10年間、見張り番は来る日も来る日も望楼に登って遙かイーリオンの山から海を越えて送られてくる烽火の合図を待ち続けていた。寒暑の下に風雨に曝され続けた番兵は夜毎の星の「共に集う様」homegyris(4)を飽きるほど見て覚えてしまい、いまは一日も早く味方が勝利を得て帰国し、この苦役から解放されるようにと神々に祈っている。しかし番兵の心を悩ますのは遠い戦場にある将兵の身の上ではなく、王宮の奥深く張り巡らされている陰謀の罫のことである。この見張りの任務も王の帰還の情報をいち早く入手して、帰国に先立ち計略を張り巡らそうと考え女ながらに「男の企みをなす」androboulos(11)王妃の命令によるのである。そのために彼は夜の間も寝ることはできずに「夜をさ迷う」nyktoplanktos(12)露に濡れた臥所で眠気と戦いながら時を過ごさねばならない。そのように不平を並べる彼の目に遠く一閃の光が煌めくのが望まれ、番兵は躍り上がって叫ぶ「狼煙の合図が」phryktoia(33)「賽の六の目が三度続いて出るように上々吉と出た」。しかし今はともかく王の帰還に期待を掛け、あたかも「大きな牛が舌の上に乗っている」ように口を噤み余計なことはいっさい口外するまいと意味ありげにほのめかして、王妃に早速報告するために番兵は王宮の中へ入って行く。

パロドス（40～263）

ここにアルゴスの長老たちから成るコロスが歌いながら登場する。コロスは正義の名分

の下にギリシア軍がトロイア遠征に旅立ってはや10年の歳月が経ったことを回顧する。その昔アガメムノン王とメネラーオス王の兄弟は、ゼウスから「ふたつ玉座」*dithronos*(43)の地位を授けられ「ふたつの王笏の」*diskeptros*(43)名誉を担うという軛を負わされて、アルゴスの市民から成る兵士を乗せた「壺千艘の」*chilionautes*(45)艦隊を率いトロイア遠征に向かった。トロイア懲罰の遠征に出で立つ二人の王の憤然として雄々しい姿は猛禽にも見紛うばかりであった。その猛々しい姿は巢の上に高く「輪を描いて旋回し」*strophodino*(51)「巢に籠もる」*demnioteres*(53)雛を守ろうとする二羽の鷲が、その苦勞も空しく雛鳥が攫われてしまった時の憤怒の様にも似ていた。それはまた雛鳥を奪われた「鳥の嘆きの声に」*oionothroos*(56)天上の神々が耳を傾け「鋭い叫び」*oksyboes*(57)で嘆く鳥の訴えを聞き入れて、時宜を計り「遅れて罰する」*hysteropoinos*(58)懲罰者エリーニュエスを差し向けるのにも似ている。

この戦いは「数多の男を持つ」*polyanor*(62)女ヘレーンのために、主客の掟を守るゼウスがパリスに向けて起こした戦いであり、戦場では多くの組み討ちに戦士たちの「手肢は疲れ」*gyiobares*(63)両軍の激突で槍も砕かれるだろう。しかし老人であるコロスは「幼児なみの」*isopais*(75)体力をしているためにその壮挙に加わることもできず後に取り残されている。老いた身体には戦の神アレースの宿ることも無く、枯れ木のように杖を便りによるめき歩く「昼間にうろつく幻影」*hemerophantos*(82)のような存在に過ぎないと我が身の頼りなさを嘆く。

コロスはまた王妃クリュタイメーストラが「燔祭を捧げる」*thyoskeo*(87)犠牲式の用意をしているただならぬ様子に気が付く。「都を護る」*astynomos*(88)すべての神々の祭壇に捧げられた供物が「天にも届けと」*ouranomekes*(92)燃え熾る松明の灯に煌々と照らし出され、宮殿からは塗油が香しく漂って来る。これは何か不吉な凶事の予兆か変事の報せかと「悪しき煩い」*kakophron*(100)は長老たちの「心を蝕み」*thymoboros*(103)彼らはその恐れを除くための説明を王妃に求める。

コロスは十年前に「ふたつの玉座」*dithronos*(109)を分かち合うアガメムノンとメネラーオスの兄弟王がトロイア遠征に出立した時の状況を回顧する。出征に備えて陣立てを整えた全軍の前に姿を現したのは軍功と勝利の吉兆となる黒白二羽の鷲であった。それは王宮の屋根の右方「槍を揮う」*doripaltos*(117)手の方角「万人の目に付くところに」*pampreptos*(118)座を占めて、「仔を身ごもった」*erikymon*(119)兎を貪り喰らっていた。

この前兆を聡明な「従軍の予言者」stratomantis(122)カルキスは占って解き明かした。王宮の屋根で「兎を食る」lagodaites(123)二羽の鷲はアトレウス家の二人の王を示し、その行為はプリアモスの都が陥落して「人々の持つ豊かな」demiopletes(129)財産が劫掠される様を意味する。しかしただ一つ気掛かりなのは荒鷲が母兎を「胎児もろともに」autotokos(137)貪り犠牲にした前兆が示す意味であり、野生の獣の保護者であるアルテミスの祟りがないかと心配であると占い師は言う。

まことにアルテミスは「山野に棲む」agronomos(142)野獣や母親の乳房を慕う「幼獣」philomastos(142)を憐れみ慈しむ女神であり、この「翼を持つ犬」である鷲が犯した残虐な行為を憤っていたので、この鳥占いは一面では吉兆となり他面では凶兆となった。願わくは女神アルテミスがギリシア軍の出航を妨げようとして逆風を吹き送り、「船を引き留める」echeneis(149)停滞を余儀なくさせることが無いように。そして女神の怒りを解こうとして「掟に背き」「食べることも適わぬ」人身御供の犠牲式を強制することが無いように。もしその儀式が強行されるなら一族の中に怨みを残し、「男を恐れる」deisenor(153)ことのない陰謀を引き起こす危惧がある。その怨みは館に「古くから棲み着いた」palinortos(154)家政婦また「家を取り仕切る」oikonomos(155)執念深い怒り「子供の仇を討つ」teknopoinos(155)復讐霊を呼び覚ます。このカルカースの予言に対してコロスは皆に「声を合わせて」homophonos(158)嘆け、しかし善きことが勝るようにと歌う。

ここでコロスは「ゼウスの讃歌」と呼ばれる歌を唱い、この世を支配する掟についての考えを述べる。ゼウスとよばれる者の実体は人智には伺い知れないが、もしその至高の存在をその名で呼ぶことがふさわしく、また空しい苦しみを思慮から追い出そうと望むなら敢えてその存在をゼウスと呼ぼう。いかなる競技においても「あらゆる戦いに」pammachos(169)勝利を得る自信に驕り高ぶっていた者も次に現れる名手の影になり存在すら忘れられてしまう。しかし心からゼウスに勝利の讃歌を捧げる者には正しい思慮が与えられる。「苦しみによって学ぶ」(176・177)という真理によって思慮への道をゼウスは示された。しかし眠りの最中にも「悲惨を思い出させる」mnesipemon(180)苦悩は疼き、分別を弁え知るように神々は苦悩を恵みとして人間に強制するとコロスは述べる。

そしてかの時にもこのような苦悩に迫られたとコロスは出航時の悲劇に思いを馳せる。

ギリシア軍はカルキスに向かい合うアウリスの浜に大軍を集結させたまま逆風に阻まれて船団を送り出すことが叶わなかった。兵士たちは船止めによって「空き腹の餓えに」kenanges(188)苦しみ、「寄せては返す潮騒の」palirrhothos(190)浜辺で空しく時を浪費していた。烈しい風が北方から吹き募り、「暇をもて余す」kakoscholos(193)兵士たちは餓えに苦しみ、船具は痛み、「二倍に引き延ばした」palimmekes(196)時間は遅延によってアルゴス人の精華である兵士の意気を阻喪させる。その逆風の責任は女神アルテミスに不敬行為を働いたアガメムノン王にあり、女神の怒りを解くために王女イーピゲネイアを犠牲に供さねばならないと予言者カルカスは告げる。

この予言を聞いて二人の王は大いに苦悩した。王女の犠牲を拒否すれば遠征は失敗し全軍の指揮者たる王の責任は果たせないが、しかし「乙女を屠る」parthenosphagos(209)血の流れで自分の手を穢すことにも耐えられない。だが全軍の指揮者たる者がどうして「船を棄て」liponaus(212)友軍を裏切ることができようか。「風を止めるための」pausanemos(214)乙女の血を犠牲に供することを皆が熱望するのも当然な事と王はこの運命を甘受する。

このように決意して強制の軛を身に負った以上は「何事でもやってのけよう」pantotolmos(221)と言う大胆な考えに王は心を変えた。「恥ずべきことを思いつかせる」aischrometis(222)狂気は「災いの第一の原因」protopemon(223)であり人を大胆不敵にするものであるから。王はこうして「女の仇を討つ」gynaikopoinos(225)戦いのために娘を犠牲に屠る司祭の任務を敢えて引き受けようとする。

「戦いに逸る」philomachos(230)将軍たちは王女の嘆願も哀願も顧みず、彼女を牝山羊のように祭壇に乗せ、家に対する呪詛の叫びが発せられぬように「麗しき舳先」kalliproros(235)にも比すべき見目麗しい口元を抑えつける。しかし彼女はもの言えぬ代わりに「憐れみを催させる」philoiktos(241) 眼差しで一人一人を見詰めて「眼の矢」を投げ掛けて哀願するがその命乞いの努力も空しい。父親の賓客をもてなす宴席に幾度も華を添え「三度捧げた灌典の儀式」tritospondos(246)において讃歌を歌ってあげたのにと彼女は訴えかける。

その後の犠牲の様子はあまりにも悲惨であり、自分たちはそれを見てもいけないし語ることも出来ないとコロスはいう。カルカースの占いの業は必ず実現し、ディケーは「悩む者が学ぶ」と定めている。将来のことはそれが起こった時に明らかになるだろうが、その先には善いことがあるように。これがアピアーの土地を「一人で見張る」monophrouros(257)

防壁の役目を務める自分たちの願いであるとコロスは言う。

第1 エペイソディオオン (258～354)

ここにクリュタイメーストラーが登場しコロスの長は王妃に恭しく挨拶をしながら先ほどの疑問を問いかける。王妃が神々の祭壇へ「犠牲を捧げるのに忙しい」thyeporeo(262)その理由は何か善い報せがあったからなのかどうかと。

コロスの長のこの問いかけに対してクリュタイメーストラーは二通りの答をする。一つはトロイアからアルゴスに至る烽火の連絡の仕組みによってギリシア軍の勝利を知ったという説明と、他は勝利に傲ったギリシア軍が土地の神々に対して不敬の罪を犯さずに無事に帰国できるように神々の祭壇に犠牲を捧げて祈るのであると。

まず王妃はこのように早く遠いトロイアの地における勝利が伝えられたことの原因を明かす。それは火の神ヘーパイストスがイーデーの山の頂から篝火の合図を送り、「黄金の光を放つ」chrysophenges(288)松明が島々の高嶺や断崖絶壁を駆け抜けて「遠くまで旅する」telepompos(300)光の伝令を送り届け、それが「都に隣り合う」astygeiton(309)見張り所で確認されてアルゴスの王宮に報告されるまでの経緯を説明する。すなわち王妃にはこのような「松明を捧げ持つ」lampadephoros(312)者たちの連絡網が準備されており、それによって彼女はいち早くトロイア陥落の報告を受けたのであった。

王妃の関心はギリシア軍の勝利よりもむしろ敗北したトロイア方の悲惨にむけられている。トロイアはすでにアカイア側の領土となり勝利者の歓喜の声に重なって敗北者の悲嘆の声が油と酢のように「離ればなれに」 dichostato(323)分離して入り交じっている。敗者の家族は自分たちの夫や兄弟の遺骸に取り纏り、子供たちもまた自分を「育て上げて」phytalmios(327)くれた養い親の身体に添い伏して自由を奪われた身の上を嘆く。一方勝利者の側も「夜を徹した」nyktoplanktos(330)戦いに疲れ果てた兵士たちがトロイア方の持ち物を奪い空腹を充たし、野宿に代えて「囚われの身となった」 aichmalotos(334)敗者の家屋敷の中で休む。王妃の願いはただ勝利に傲る兵士が敵方の「都を護る」 polissouchos(338)神々と神殿を崇め不敬の罪を犯さぬことである。そうすれば安全な帰還の道も約束されるだろうが、今はただ「あれこれと心迷う」 dichorrhopos(349)ことなく善きことのみを願う他ないと言う。

第1 スタシモン (355～488)

クリュタイムーストラが退場したあとでコロスはゼウスと夜の女神ニュクスが「すべてを包み込む」panalotos(361)狩網をトロイアめがけて投げ掛けて奴隷の運命を逃れる事は誰も叶わなかったと歌う。主客の掟を守るゼウスはパリスを狙って弓を引き絞り、その的を外すことはない。

(I) ゼウスは定めたとおりに行動し打撃を与える。神聖なものを踏みにじる者を意に介しないと考える者は不敬である。ほどよい富があれば充分であり過度の富に驕り高ぶり正義ディケーの祭壇を足に掛けないがしろにする者には富は防壁とならない。呵責無い説得の女神ペイトーは迷妄アーテーの娘。禍いは「恐ろしく輝く」ainolampes(389)光を放ち、青銅に試金石を擦り当てれば「黒く凝り固まった」melampages(392)地色が現れる。空を舞う鳥を追う子供のように、パリスはアトレウスの館の客となり、主人の妻を盗んで賓客をもてなす食卓を辱めた。

(II) ヘレネーはギリシア人には楯を持ち槍で武装した兵士と「船で行く」naubates(405)水夫を用意させ、トロイアの地には婚資として破滅を携えて来た女と表現される。後に残されたメネラーオスは「夫を恋い慕う」philanor(411)妻の通り路の記憶を胸に屈辱の沈黙を守り、館を王の抜け殻だけが支配しているかのように見えた。「夢に現れる」oneirophantos(420)妻の幻影がはかない慰めをもたらすはするが、それも束の間に消えて後には影も残らない。さらにそれよりも大きな「耐え難い」tesikardios(430)惨めな苦しみが出征した兵士の家を覆っている。送り出した親しい者の代わりに遺骨を納めた骨壺が到着しているからだ。

(III) 「黄金を取引する」chrysamoibos(437)両替商人の軍神アレースが商うのは兵士の身体であり、神は槍の戦において運命の「秤を操り」talantouchos(439)、イーリオンの戦場から愛する家族の許に遺灰を納めた壺を送り届ける。人々は勇士の立派な最期を讃えはするが、他方では「それも他人の妻のため」と密かに呟く。悲嘆に隠れた人々の怨みはアトレウス家の君たちに向けられる。恨みを籠めた市民たちの言葉は重く「市民が認める」demokrantos(457)呪いの負債を支払わせる。「夜の闇に包まれた」nykterephes(460)言葉を聴こうとして我が心は待つが、それは「多数の者を殺戮した」polyktonos(461)者どもを神々は見過ごしにされぬからだ。黒いエリーニュスたちは不正に栄えている者どもを「運命の逆転の」palintyches(465)の苦境を味わわせ微賤の身に落とす。度を過ぎた名声も厳しいものであり、嫉みを受けぬほどの幸いが望ましい。「都を略奪する」ptoliporthes(472)者にもなりたくないし、囚われの憂き目を見るのも嫌だ。

(E) コロスは烽火の吉報が都中に広まり人々が歓喜する有様を冷ややかに見守り、その報せが真実かあるいは虚報かと疑っている。人は烽火の新しい報せに心を燃やすかと思うと、また別な便りに意気阻喪する。これは「女性が槍を揮い」支配する時に起こりやすい現象であり、「女が語る」gynaikogerytos(487)噂話は「速やかに広まり」tachyporos(486)「速やかに消え去る」tachymoros (486)ものだとコロスは言う。

第2エペイソディオン(489～680)

クリュタイメーストラーが再び登場して烽火の合図に対するコロスの疑念に答える。間もなく分かるでしょう「光を運ぶ」phaesphoros (489)烽火の合図とその連絡方法について。ほらあそこに海岸の方から伝令がやって来ます。あの土埃がその証拠。彼が自分の声で喜びを告げ報せるだろうが、その反対なら聞きたくないと王妃は言う。

そこに伝令が故国から離れて十年の後に王が勝利を得て凱旋する報せを持って一足先に帰って来る。伝令は故国の大地とゼウス、アポロンに呼びかけ、とりわけ伝令の職分の「名誉を与える」timaoros(514)守り神ヘルメースに感謝を捧げ、生還する兵士と王アガメムノーンを祝福するように祈る。王は「正義をもたらす」dikephoros(525)ゼウスの鶴嘴でトロイアの地を掘り返し、祭壇も神殿も土地の裔もすべて破壊し尽くされたと誇る。パリスは犯した悪行に倍する罰を受け父祖の土地を「すべて滅ぼし」panoethros (535)「国土もろとも」autochthonos (536)喪ったと報告する。

伝令はさらに異国の土地で彼らが耐えてきた厳しい境遇について語る。彼らの船上の宿営の場所は「均し方の悪い」kakostrotos(556)凹凸のひどい場所であり、陸上の野営地は露に濡れ「鳥も(凍え)死にする」oionoktonos(563)ほどの冬の寒さと烈しい夏の暑さに曝されていた。その苦難は死者に比べて生者の方が幸運だとも言えぬほどであり、生者がそれを嘆いて運命の「再び開く」palinkotos(571)傷口に苦しむ必要もない。むしろ遠征軍が持ち帰って神殿に捧げた戦利品と將軍たちを賞賛し、ゼウスに感謝を捧げるべきだと彼は言う。

クリュタイメーストラーは烽火による通信方法が確実であることを強調する。「火の報せ」phryktoros(590)を見張る番兵に説得されてトロイアの陥落を信じ込んだと王妃は非難され、その報せが真実であると信じてはもらえなかった。しかし王妃がその便りを信じて神々の祭壇に犠牲を捧げていると、女たちの喜びの声が都中に伝わり神殿の座に「犠牲を貪る」thyepagos(597)炎の香煙が充ち満ちた。今は一日も早く王の帰還を待ち望み歓迎

の準備をせねばならない。自分は留守中に忠実な番犬のように家を守り、いささかの非難も受けぬように身を慎んだと自分の貞節ぶりを必要以上に強調する。

すると伝令は勝利を祝う喜びの日を「悪しき便りを伝える」kakangelos(636)舌で穢すのはふさわしいことではないかと断って、アガメムノン王の一行を乗せた船団が帰国途上で嵐に遭い、多くの船と兵士が波に吞まれて行方知れずになった経緯を物語る。軍神アレースの好むのは「二重の鞭」と「二重の穂先を持つ」dilonchos(643)槍、また「血塗れの二頭立ての戦車」であり、神は勝者にも敗者にも等しく打撃を加えるのだと彼は述べる。

「火と海」とが共謀して帰国するギリシアの船団を襲い、味方の船が仲間の船をその舳先の「角で突く」kerotypeo(655)という混乱に陥り、船は「打ち付ける暴風雨」ombroktypos(656)に揉まれて視界から消えてしまった。嵐がやっと収まると一面に散乱するのは船の残骸と兵士の屍であった。自分たちは幸運の女神に守られて「固い巖の」krataileos(666)暗礁に打ち付けられる事もなかったが、しばらくはこの惨害を信じかねて心の中で「牛を追う」boukolo(669)時のように反芻し思い返していた。このような情勢だから皆もメネラーオス殿の帰国を願って祈って欲しいと遭難の状況を述べる。

第2スタシモン（681～809）

ここでコロスはトロイア戦争に至るまでの経過を回顧する。ここではヘレネーとパリスがトロイアに破滅をもたらす花嫁と花婿として対比されている。

(I) ヘレネーはその名のとおり正しく戦争を引き起こすための女であり「槍と結婚した花嫁」dorigambros(687)であった。すなわちヘレネーはその名を解けば「船を滅ぼす女」helenaus(689)であり、「男を滅ぼす女」helandros(689)であり、「都を滅ぼす女」heleptolis(689)であった。彼女は「繊細で高価な」habrotimos(690)布の几帳を脱けて婚家棄て船出した。その後を西風に乗って「数多の兵士」polyandros(693)が数多の「楯を携えて」pheraspis(694)「獵犬を率いる」kynagos(694)狩人のように隠れた櫂の臭いの跡を追ってトロイアに向かい、シモエイス河の「木の葉の茂る」aeksiphyllous(697)川辺に船を着けた。

「哀悼また係累」と二重の意味を籠めて「正しく名を付けた」orthonymos(699)嘆きの主を、「己の意図を成就する」telessiphron(700)瞋恚の女神はイーリオンに送り付けた。歓待の食卓と賓客をもてなすゼウスへの辱めを後になって罰を与える瞋恚は、「花嫁を讃える」nymphotimos(705)歌を歌った者たちにその嘆きを送り届けたのだ。

しかし今プリアモスの古さびた都は歌を「新たに学び」metamanthano(709)「大いなる哀悼を」polythrenos(711)激しく歌い嘆く。パリスを「不吉な婚姻の」ainolektros(713)男、「すべてを滅ぼす」pamporthes(714)男、「嘆きに満ちた」polythrenos(714)男と呼びながら、市民たちの流された血の悲しみに都はいま耐えている。

(II) パリスはその一族にとってある人が「乳房を慕う」philomastos(719)仔獅子を家の中で飼育しているようなものだ。幼い中はそれは「子供たちの愛玩物」euphilopais(721)となって可愛がられまるで「生まれて間もない(子供)」neotrophos(724)子供のようにあどけなく「輝く眼差し」phaidropos(725)を向けて慈しまれる。しかし時を経て成長すると親譲りの獐猛な性分を露わにし、「羊を屠る」melophonos(730)災厄をもたらし、家の中は血にまみれ、「数多を殺す」polyktonos(734)殺戮の耐え難い苦しみが一家を襲う。これはまるで神の命により家の中に禍の祭司が育てられているようなものだ。

(III) ヘレネーがイーリオンの都を訪れたときも、穏やかな海の精のように「心を悩ます」deksithymos(743)愛の眼差しで道ならぬ恋を成就させた。しかしそれは「家の禍」dysedros(746)「禍なる伴侶」dysomilos(746)であり、主客の掟を守るゼウスの遣わした「若妻たちの嘆き」nymphoklautos(749)となるエリーニュスであった。

「正義の讃歌」

(III) ここでコロスは「正義の讃歌」と呼ばれる歌を唱い、ヘレネーとパリスの無思慮な行動の背景をなす富者の驕りについて述べる。

人びとの間に「古くから語り伝えられる」palaiphatos(750)物語がある。人間の幸いが大きく育ってしまうと必ず子供を産んで死に、善い運命から一族にとって限りない悲惨が生ずるといふ。しかし私は他人とは異なって「自分独特の考え」monophron(757)を持っている。それは不敬の業こそが自分の血筋によく似た子供を産むのだという考えである。だが正義を守る「真っ直ぐな正しい」eytydikos(761)家はそれにふさわしい「美しい子供」kallipais(762)すなわち幸運に常に恵まれるのである。

(IV) また古びた傲慢ヒュブリスは悪い人びとの間で若いヒュブリスを生むのが常だ。定められた産み月がくると不敬な暴挙トゥラソスと一家の禍アーテーを生む、親に良く似た子供を。

(IV) しかし正義ディケーは煤まみれの家にも光輝き義しい人を誉め讃える。だが「黄金を散りばめた」chrysopasto(776)住居に住んでいても穢れた手をしている者に対しては「面を背け」palintropos(777)敬虔な人が住む家に行く。正義ディケーは偽りの賞賛を受ける

富の力を尊重せずに皆を正しい道に導く。

そこにアガメムノーン王が登場し、コロスは王に歓迎の挨拶を送る。トロイアの「都を略奪する」ptoliporthos(783)王よ、アトレウスのご子息よと。王を歓迎する振りをして「同じ表情」homoioprepes(793)で無理に作り笑いをしている者がいても、「羊の性質を心得ている」probatognomon(795)優れた牧人ならば人々の表情を見逃すことは無く、善意の気持ちを取り繕っていても「水で薄めた」好意でへつらっているにすぎない。さていまや心の奥底からまた裏心から首尾よい結果を収められたことをお喜び申し上げます。やがて時がたてば正しく「家を取り仕切る」oikoureo(809)者とそうでないものとお見分けになるでしょうと暗に王に対して陰謀が仕組まれていることをコロスはほのめかす。

第3エペイソディオオン(810～974)

アガメムノーンの挨拶

アガメムノーンはまずアルゴスと土地の神々に挨拶をする。神々は彼に無事な帰国を許しトロイアに正義の裁きを執行し給うた。神々は敵方の弁論による訴えにも耳を貸さず、「男を殺す」androthnes(814)イーリオンの破壊の票決を「躊躇うこと」dichorrhopos(815)もせずに血塗れの壺に投票したが、その反対の赦免の壺には希望のみが近づいて実際に投票する神の手は無かったのだ。都は今も煙に包まれ災厄の嵐が吹き荒れて、壊滅する都の灰燼は豊かな香煙を吹き送る。

これらの恵みを「常に心に留めて」polymnestos(821)神への感謝を忘れてはならない。敵の都に苛酷な投網を投げ掛けアルゴスの猛獣がそれを灰燼と成し、プレイアデスが沈む時刻に「楯を携える」aspidostrophos(825)兵士たちが木馬の中から跳び出して襲いかかった。「生肉を喰らう」omestes(827)獅子が城壁を跳び越えて、貴公子たちの血糊を存分に舐めたのだ。

さて汝らの忠告は良く聴いて心に留めておこう。人の心は他人の幸運を嫉むものであり、忠実な振りを装ってもその実は影のようなものだ。ただオデュッセウスのみは始めこそ心ならずも遠征に加わっていたが、いったん轆を掛けられると「挽き綱を引く」seiraphoros(842)添え馬の務めを立派に果たしてくれた。その男の生死もいまは定かではない。いまはまず館に入って家を守る神々に帰国の挨拶をしよう。

クリュタイメーストラの挨拶

王妃が登場して王の無事な帰国を祝い歓迎の挨拶を述べるが、その長々しい口上と大仰

な言葉遣いによって、聴衆の耳には彼女の偽りの気持ちと謀みが聞き取れるように構成されている。まず彼女は自分が「夫を愛する」philanor(856)気持ちを市民の皆が聞いている前で露わにすることは躊躇う必要がないことを強調する。夫が異国で戦っている間に自分がどれほどの孤独に耐え、心ない人々の「悪意のある」palinkotos(863)噂を忍んで来たかと彼女は言う。前線から便りがあるたびに王の安否についての誇大な誤報が続き、それを信じていれば王の身体には網目よりも多くの疵が穴を開け、幾たびも死を経験した王は「三つの身体を持つ」trisomatos(870)ゲーリュオンにも比べる事ができ、数カ所に上る墓所は「三枚重ねの」trimoiros(872)大地の衣で覆われていたことになる。それらがすべて虚報であり、こうして無事な王を迎えることが出来るのは喜ばしい限りである。

このような「敵意を持った」palinkotos(874)噂に自分が苦しみ息子のオレステースの世話に不安があったために、あの子はいま王の「槍の盟友」doryksenos(880)であるポーキスのストロピオスの許に預けてある。それは王の身の上の危険とまた「民衆の喚きたてる」demothrous(883)無法状態を恐れたからである。その間「遅く臥所に行く」opsikoitos(889)自分には涙が涸れることがなく、「狼煙台」lampterouchia(890)の報告も頼りにすることができなかった。

これらすべての悲しみから自由になった心で夫である王の便りになる番犬のような方、船の太綱、大屋根を支える大地に「しっかりと足を据えた」poderes(898)大黒柱、父親にとっての大切な「一粒種の息子」monogenes(898)、水夫にとっての陸地、嵐のあとの晴朗な日、「道を行く」hodoiporos(901)喉の渴いた旅人にとっての尽きせぬ泉に喩えてあなたを歓迎するのがふさわしい、と王も辟易するほどの美辞麗句を並べ立てる。そしてこのように大切な夫である王を歓迎する証として貴い足を地面に触れさせないように「紫布を繰り広げた」porphyrostrotos(910)道を作り王を迎えるべきであると王妃は言う。

アガメムノーンはその大げさな歓迎の言葉を「自分の留守の長さに見合った口上だ」と驚き呆れながら、皆の者が「地にひれ伏して」chamaipetes(920)自分を迎えてはならないと拒否する。また高価な紫布を地に敷いて嫉みを招いてはならない、そのような「名誉を捧げる」timalptheo(922)のは神々に対してであり、その上を歩むことは怖れなしで自分できない。「足拭き」podopsestron(926)などが無くとも名声は明らかだ。栄えの中に人生を終えることが真の幸せなのだ、と言って彼は王妃の贅沢を戒める。この虚飾を憚る王の気持ちに王妃は執拗に逆らって、もしこれがプリアモスの立場だったらどうしていたかと王の競争心を煽るが、「民衆の叫び声」demothrous(938)も大きな力を持つと王は怯む。し

かし王妃はこの場は自分に勝ちを譲って言うとおりにするよう説得する。

アガメムノーンはついに執拗な王妃の説得に負けて敷物の上を歩むことにするが、それでもなお貴重な紫布を損なうことを怖れて軍靴を脱ごうとする。「海で作られた」*halourges*(946)紫貝で染めた衣の上を歩む自分を神々の誰かが遠くから嫉妬の眼差しで見ることがないように「銀で贖い求められた」*argyronetos*(949)織物を足で踏んで損なうことは「家を滅ぼす」*domatophthro*(948)行為に等しいと彼は言う。だが彼は妻の言い分を受け入れて従うことにし、捕虜として伴ったカッサンドラーを優しく扱ってくれるよう王妃に託して王宮の中に入る。

後に残った王妃は「銀に等しく」*isargyros*(959)高価な紫を「常に新しく」*pankainistos*(960)作り出す紫貝の染料で染めた衣など自分は数多く所蔵しており、それに欠乏することはないと言って王家の財力を誇る。そしてもし神託の命令が下っていたらその高価な衣料を足で踏むことも厭わなかつただろうと言い放ち、王が帰還したこの時を機にかねてからの陰謀計画を成就させてくれるようにゼウスに祈る。

第3スタシモン(975～1034)

(I) 王妃が去った後コロスは王の凱旋を祝う気分とはほど遠い、迫り来る陰謀の実現を予見しているかのように陰鬱な不安を籠めた歌を唱う。何故に自分には「前兆を見張る」*teraskopos*(977)預言者のように心の前を恐れがつきまとって離れず飛び回るのか。命ぜられも頼まれもせぬのに歌が「予言して」*mantipolo*(978)心の座所に座り込み、定かならざる夢のように説きつけている。これは「船で行く」*naubates*(987)遠征軍がアウリスの浜からイーリオン目指して船出して以来のことである。

王が無事に帰還した様子はたしかに確認し、それはこの「我が身が証人」*automartys*(989)である。しかし自分の魂は琴の調べも伴わずに「哀歌をうたう」*hymnoideo*(990)が、それは「ひとりで習い覚えた」*autodidaktos*(991)哀歌であり、希望を抱く元気もない。陰謀が「目的を成就」*telesphoros*(996)しようとする事件の渦中において、自分はただその事件の予感が「成就される」*telesphoros*(1000)ことがないようにと祈るばかりである。

(II) どれほど健康に恵まれている人でも病いは「壁を共有する」*homotoichos*(1004)隣人としてすぐ傍に控えている。また「まっすぐに進む」*euthyporeo*(1005)運命を授かっていると思いついていても行く手には暗礁が待ち構えている。また財産の一部を適切に

処理し放棄するならば、禍いを積み込み過ぎた船のように船体が沈没することはない。ゼウスは豊かな賜物を与え、畑の畝は年毎に実りを恵み、餓えの病を止めてくれる。

しかし生命の黒い血がひとたび地面に流されたなら、誰がそれを呪文で呼び戻しえようか。死者を蘇らせる業を「正しく学んでいた」orthodaes(1022)アスクレーピオスでさえ、敬神の念を守らせるためにゼウスは撃ち滅ぼした。もし定められた運命を引き延ばすことが許されているならば、私の心は舌の先回りをして事を明かしていただろう。しかしいまは暗闇の中で「悩む心」thymalges(1031)は咳き「燃え上がる」zopyreo(1033)ばかりになっている。このようにコロスは王暗殺の陰謀に気づき、その実行が間近に迫っていることを予感しながらも口にすることができない焦慮を唱う。

第4 エペイソディオン（1035～1406）

王宮から出て来たクリュタイメーストラは戦車の中にただ一人残されているカッサンドラーに声を掛け、他の奴隷に交じって儀式の準備を整えるように言いつける。トロイアの王女であった彼女も捕虜になり奴隷の身分に落とされた以上は、「相続財産に富む」archaioploutos(1043)豊かな主人に仕えることを幸運と思わねばならないと命ずる。しかし王妃のこの言葉にも答えずに車の中に黙したまま突っ立っているカッサンドラーに向かって、コロスは運命を甘受して「車に備わった」hamakseres(1054)座席から降りるように諭し、王妃は燕のように異国の言葉しか理解せぬ彼女であっても、無理に従わせて王宮の広間の「真ん中を占める」mesomphalos(1056)炉端で犠牲式の手伝いをさせようという。しかし彼女の様子は「捕らえられたばかりの」neairetos(1063)獣のようで、「占領されたばかりの」neairetos(1065)都を後に連行され心が狂っているとしか見えない。

アモイバイオン（1072～1177）

王妃が宮殿に入って犠牲式を準備している間に一人舞台に取り残されたカッサンドラーは預言者の憑依の状態に陥り、これから行われようとする惨劇の背景となる一族の陰惨な歴史を振り返って述べる。

(I) 一人になった捕虜の王女カッサンドラーは始めて口を開き、彼女が仕える神アポロンに呼び掛けて憑依の幻視状態に陥るが、コロスにはその意味が理解できず単に神に助けを求めているのだろうと思う。

(II) コロスは次第にカッサンドラーが神に呼び掛けながら神託を述べようとしているこ

とに気付き、今彼女が居る場所はアガメムノーンの王宮の前だと教える。

(III) 彼女はそれを受けて、これは「神を憎む」*misotheos*(1090)家であり「親族殺害の」*autophonos* (1091)罪の記憶に取り憑かれ、「人間の屠殺場」*androsphageion*(1091)であり、血塗れの床を持つ所であるという。コロスは彼女が王家の同族殺しの忌まわしい過去を言い当てたことに驚く。

(IV) カッサンドラーはアトレウス家の惨劇を全て現在の出来事として幻の中に見ているため、それを聞いて驚きながら反応するコロスとの問答に食い違いが生ずる。彼女は一代前のアトレウスとテュエステースの王位を巡る兄弟の争いに言及するが、これはコロスにも理解できる。しかしクリュタイメストラが「臥所の伴侶」*homodemnios*(1108)であるアガメムノーンを浴室で洗い清めてから実行しようとしている謀みについてはコロスは謎めかした「神のお告げ」*thesphaton*(1113)としてしか理解できない。

(V) カッサンドラーはコロスの戸惑いも意に介さず、いま王宮内で行われようとしている王暗殺の場面を描写する。「いま見えるものは何か、ハーデースの投網か？いや、床を共にする投網だ、殺人の共犯者だ。石打の刑の犠牲に叫びを挙げよ。」彼女の語る謎のような幻覚にコロスは復讐の女神の登場を直感し、恐怖で「サフラン色の血の滴が駆けめぐる」*krokobaphes*(1121)思いをしながらもその真相が理解できない。

カッサンドラーの語る予言はさらに急迫する。雌牛が雄牛を衣の罫に追い込んで「黒い角」*melankelos*(1127)を打ち込み、今まさに浴室の「陰謀による殺人」*dolophonos*(1129)を実行している最中であるという幻視に対してコロスは途方に暮れるばかりである。コロスは自分たちが「神託の優れた解説者」*thesphaton*(1130)ではないが、「神のお告げ」*thesphaton*(1132)が人間にとって何か良い言葉をもたらさない事ぐらいは分かる。これは「言葉を連ねた」*polyepes*(1134)まやかしが「予言の歌」*thespioidos*(1134)に恐怖を与えるからだと彼らはいふ。

(VI) 次にカッサンドラーは自分を「悪しき運命の」*kakopotmos*(1136)惨めな女と呼び、この地まで王に従ったのは死を共にするためだったかと、その悲運を嘆く。しかしコロスは彼女の「心が狂い」*phrenomanes*(1140)「神に取り憑かれている」*theophoretos*(1140)ためだと言ひ、我が身を嘆いて暮らすプロクネーの変身した鶯に彼女をなぞらえる。

しかしカッサンドラーはもし自分が鶯ならば「羽根をまとった姿に」*pterophoros*(1147)身を包み楽しい日々を過ごしているはずだが、今の自分を待つのは両刃の槍で身体を割かれる運命だと答える。コロスは彼女がどこからそのような「神に取り憑かれた」

theophoros(1150)ような幻を得て苦しみ、それを高い「調べに乗せて」 melothypo(1153)歌い上げるのか、また「神が告げ知らせて」 thespesios(1154)「災いを告げる」 kakorrhemon(1155)予言の涯はどこにあるのかと問う。

(VII) カッサンドラーはまたこの悲運の原因となったパリスの結婚に話しを戻し、以前はスカマンドロスの河の畔に暮らしていたのに、今日からは地獄のコーキュートスの岸辺で神の「お告げを歌う」 thespioideo(1161)のだと自分の死が迫っていることを知らせる。コロスもこの予言だけは「生まれたばかりの」 neogonos(1163)赤子でもはっきり分かるが、彼女が何故この様な予言をするのかと問いながら痛ましい同情の念に捕らわれる。だが彼女は父王が故郷の城門の前で惜しみなく「数多を殺して」polykanes(1169)神々に捧げた「草を喰む」 poionomos(1169)家畜の犠牲も都が陥落する運命を防ぐためには無益であった、自分は「熱い心を」 thermonous(1172)胸に抱いて地に倒れ伏すだろうと言う。コロスはこれもいずれかの神が彼女に「悪意を抱いて」 kakophroneo(1174)重い足で跳びかかり、痛ましい「死をもたらす」 thanatophoros(1176)苦しみを唱わせているのだろうと言う。

カッサンドラーはここから憑依の幻視から正気に帰り、神託の意味を正常なことばでコロスに語り始める。神託はもはやヴェールの覆いの陰から「嫁いだばかりの花嫁」 neogamos(1179)が外を見るように曖昧なものではなく、日の昇る方角に風が吹き付けるように爽やかに明快なものになる。これよりもさらに大きな苦しみの波が打ち寄せようとしており、もはや謎めいた言い方をしないからその証人となってともに古い昔に行われた犯罪の「臭いの跡を追う」 rhinelato(1185)仲間になってくれるよう彼女はコロスに頼む。

こうやって彼女はこの家に伝わる同族殺しの呪いの「発端となる禍い」protarchos(1192)、王座をめぐるアトレウスとテュエステースの兄弟の争いについて語る。その古い怨念は復讐の女神の姿をとって館の隅々に居座り、父の怨念を報いようとするアイギストスの一念と娘イーピゲネイアーの恨みを晴らそうとする王妃クリュタイメーストラーの思いとが一致して王暗殺の陰謀にまで進展する。その報復の呪いの応酬を家に取り憑く復讐の女神の姿で言い表したカッサンドラーは、自分が「偽りの予言者」 pseudomantis(1195)か、「門を叩く」 thyrokopos(1195)お喋り女としか見えないかと彼女はコロスに問い質す。

正気に返って普通の言葉で話すカッサンドラーが真実の予言者であるという保証はしかねるが、彼女が「他所の国の言葉を話す」 allothrous(1200)都の内情を正しく言い当てた

ことにコロスは驚く。アポローンはいったんは予言の能力を授けたが、神の意志に従わない自分を罰して人々がその言葉を信じないようにしたのだと彼女は説明する。

そのように語っている間にもカッサンドラーは、ああまた「正しい予言」orthomanteia(1215)の苦しみがやって来る、と呻きながら新たな神懸かり状態に入る。彼女は父親のテュエステースが騙されてその肉を食べさせられた子供たちの霊を家の門先に幻視し、その子供たちの生き残りで父の恨みを晴らそうとする「家の見張り番」oikouros(1225)アイギストスの姿を見る。アイギストスは復讐の念を秘して王妃の寝所に入りし、王妃と共にアガ멤ノーンの帰還を待っている。このような「大胆な企て」tolma(1231)を謀んでいる雌犬を何という名で呼んだらいいのか、猛獣か、双頭の毒蛇か、スキュラか、「大胆極まる」pantotolmos(1237)この女を。この私の予言を信じなくてもよいが、成るべき事は起こるだろう。そうすれば皆は私を憐れんであまりにも「真実の予言者」alethomantis(1241)だったと言うだろうとカッサンドラーは予言する。

子供たちの犠牲の話だけは理解できると言うコロスにカッサンドラーはアガ멤ノーン暗殺の謀みも進行中であることを示唆するが、彼らはそれが信じられず、またその下手人についても見当が付かない。彼らは「ピュートーのお告げ」pythokrantos(1255)も理解し難い点では同様だと言う。

カッサンドラーはまた別な幻視を得て語る。彼女は「二本足の雌獅子が気高い雄獅子の留守に狼を寝床に引き込み哀れな女を殺そうとしている」幻を見て、王妃がその愛人と共に王と自分を殺そうとしている様を描写する。そして自分を嘲笑の的とするばかりで何の役にも立たなかった巫女の衣装をかなぐり捨てる。敵も味方も「紛れもない」oudichorropos(1272)口調で「放浪のいかさま師、乞食女」「餓え死に寸前の女」limothnes(1274)などと悪態を吐いてきたがそれを自分は忍んで来た。しかしいまは「予言の神が予言者の私を棄て」このような死の運命に導いた。しかし私たちはこのまま不名誉な死に方はしない。私たちの「復讐者」timaolos(1280)が「母を殺す」metroktonos(1281)若枝が必ず現れるだろう。イーリオンは滅び、またそれを破壊した者も滅んだのを自分は見てきたのだから、この期待を胸にして死に向かって歩を進めようと彼女は言う。

コロスは数々の苦しみに耐えた彼女が「神に追われる」thelatos(1297)雌牛のように死に赴くのかと危ぶむ。彼女は最後に館に漲る「血潮の滴る」haimatostages(1309)殺戮の気配にたじろぐが、「女の私の死の報いに女が死に、夫の死の報いに別の男が死ぬ」という「死の予言」thesphaton(1321)を残し、自分の「復讐者」timaoros(1324)の出現を予期し

て王宮の中に入っていく。

その後ろ姿を身ながらコロスは感慨を述べる。人間の性質は富貴を食欲に求めるものであり、人に「指を指して示されるほどの」daktylodeiktos(1332)家に住む者でも足ることを知らない。この王もプリアモスの都を獲得して「神の名誉を受けて」theotimetos(1337)帰国するが、以前に流された血の代償を払うのだとすれば、人間の中の誰が神のご加護の下に生まれたと誇ることができようかと。

アガ멤ノン暗殺

カッサンドラーの予言が次第に明らかになるにつれて長老たちのコロスの不安は高まっていく。そこに「急所にずぶりと一突き、また二突き喰らったぞ」というアガ멤ノンの叫び声が館の中から聞こえてくる。その叫びを聞いてコロスにもやっとあの予言が果たされようとしていることが理解され、今すぐ館の中に踏み込んで「抜きはなった」neorrhytos(1351)刀を証拠に事件を糾明しようとする。長老たちは王妃たちが正当な君主を暗殺によって廃し、僭主政治を打ち立てようとするのではないかということは何よりも恐れている。

クリュタイメーストラーの強弁

暗殺の目的を果たした王妃は王とカッサンドラーの二人の遺骸と共に登場して、これまでその場の事情に応じて言ったのと反対の言葉を述べても恥ずかしい事とは思わないという。それは友と思われている敵に敵意を籠めて禍の「網を張り巡らす」arkystaton(1375)ためである。彼女にとってこの争いは古い争いが遅れてやってきたのであり、今やっとその仕事を成し遂げたのである。自分は夫を出口のない投網の中に閉じこめて二度撃ち、ぐったりと倒れたところに三度目の打撃を打ち下ろした、地下のゼウスへお捧げものとして。その傷口から吹き出す血しぶきを全身に浴びたが、それは「神の与えた」diosdotos(1391)恵みの雨に蒔かれた穀物が喜ぶ気持ちにも較べることができた、と復讐の念の強さを語る。長老たちよ、喜んで欲しい、もし喜べるものならば。屍に与えるふさわしい言葉は、正しくこれにまさる正義に適ったものはない。とこのように勝ち誇って豪語する王妃に向かってコロスはなんと「大胆な口を利くことか」thrasystemos(1399)自分の夫に対してそのように「大言壮語するとは」と呆れるばかりであった。それに答えてクリュタイメーストラーは自分を弁えのない女として扱おうとしているが、褒めても非難しても同じ事だ、この死骸がアガ멤ノンであり、正義を執行するこの右手の働きの結果なのだと宣言する。

エクソドス(1407~1673)

ここからはコロスの斉唱とクリュタイムーストラーの間で緊迫した応酬の対決になる。

(I) コロスは王妃がいまままでの貞節の装いをかなぐり捨てて本心を明らかに王への憎悪を露わにした変身ぶりに仰天する。彼らは王妃が「大地の養う」chthonotrephe(1407)悪しき食べ物、または海から得られる悪しき飲み物を口にしたのでこのような凶行に及び、「民衆が叫ぶ」demothrou(1409)呪詛を一身に引き受け、故国から追放される身を厭わぬのかと疑う。

クリュタイムーストラーはそれに答えて言う。お前たちは今になって私を国から追放すると裁きを下し、「民衆が叫ぶ」demothrou(1413)呪いを受けるなどと言うのか。あの時はこの男に対して何も反対などしなかつたにせよ。この男は牛や羊を殺すように自分の娘を、私が腹を痛めて産んだ子を、逆風を収める呪いのために犠牲に捧げたのだ。この男をこそこの地から「追放する」andrelateo(1419)べきではなかったのか、血の穢れの代償として。それなのに自分のしたことを聞くが早いとお前たちは厳酷な裁判官になるのか。そのように脅しても、神が逆の決定を下した後になって分別をもっても手遅れだぞ。

(I) これに対してコロスは言う。あなたは「大きな謀みをする」megalometis(1426)大それた方だ、高慢至極に喚き立てて、殺人の「血塗れの」phonolibes(1427)運命に心が狂っているようだ。血の滴りが眼にはっきりと現れている。これからは友人も失って撃った仕返しに撃ち返されねばならない。

これに答えてクリュタイムーストラーは言う。私の娘の成就された正義の女神ディケー、禍の女神アーテー、復讐の女神エリーニウスにかけて私はこの男を殺したのだ。だがアイギストスが家の炉を守ってくれる限りは恐怖がこの館に足を踏み入れることは無いだろう。ところでこれは「捕虜になった女」aichmalotos(1440)また「女占い師」teraskopos(1440)そしてこの男と「臥所を共にする女」koinolektros(1441)、寝床を分け合う信頼厚い「予言を語る女」thesphatelogos(1441)、船の漕ぎ座を「共に擦り減らす女」isotribes(1443)、とこのように王妃は夫の愛妾に対する蔑みと憎悪を露わにする。

(II) 王弑逆、夫殺しという二重の凶行を演じたにも関わらず、その行為を正当化し得意気に豪語する王妃の姿にコロスは戦慄し絶望の思いで述べる。病苦に苦しむこともなく長患いで「床に寝付く」demnioteris(1449)こともない永遠の眠りの終わりの日が速やかに来るように。寛仁な保護者が多くの苦難に耐えた後、女のために倒され女のために破滅した。ああ心狂ったヘレネーよ、お前はただ一人で多くの生命をトロイアの地で滅ぼし、今も

また洗い清めることも叶わぬ血潮で「永く記憶に残る」polymnastos(1459)完璧な華を飾った。まことにあの時には夫の苦悩の源となる争いの女神エリスがどっしりと「腰を据えて」eridmatos (1461)館の中に控えていた。

しかしクリュタイメーストラーはコロスを宥めてこのようなことで悩み死を望まぬように説き、この惨劇の責任をヘレネーだけに負わせるのは間違いだと主張する。またヘレネーを「男を滅ぼす女」androleteira(1465)と呼び、一人で多くのダナオス人を滅ぼし辛酸を嘗めさせたなどと彼女に恨みを向けてはならぬという。

(II) コロスはダイモーンに呼び掛けて、悪霊がタンタロスの「二人の子孫」diphyios(1468)と家を襲ったと嘆く。ヘレネーとクリュタイメーストラーの姉妹二人の女たちが「心を合わせて」isopsychos(1470)力を揮い、自分たちの「心臓を食い破る」kardiodektos(1471)ような容赦ない力で支配している。そして王妃はいま忌まわしい鴉のように遺骸の上に突っ立って調子はずれの歌を唱っていると言う。

それに答えてクリュタイメーストラーは言う。さてお前たちは「口の考え方（言い表し方）」を変えて「三たび肥え太った」tripachyntos(1476)この一族のダイモーンを呼び出すのだな。「血を舐る」haimatoloichos(1478)欲望が腸の中で養われ、古い苦悩と新しい流血に飽きるまで。

(III) コロスはここで一族を暗く覆う呪いについてそれがゼウスの神慮によるものであることを改めて強調する。まことに「家を支配する」oikonomos(1481)神霊「重い憤怒」barymenis(1482)についてあなたは語る、悪しき禍いアーテーの飽くなき宿命の物語を。おお、「万事に責任を負う」panaitios(1486)御神、「万事を成就する」panergetes(1486)ゼウスよ。人間にとって何がゼウスによらずに成し遂げられるだろうか。これらの出来事のいずれが「神の御業」theokrantos(1488)ではないのか。また非業の死を遂げたアガメムノン王が「不敬な蜘蛛の巣」に掛かって生命を落とし、謀りの運命により妻の手で両刃の得物に撃たれ不名誉にも床に伏すと嘆く。

ここに到りクリュタイメーストラーは全ての虚飾をかなぐり棄て自分を復讐霊の化身だと宣言する。これを私の所業だと言い張るのか。私はもはやアガメムノンの妻ではない。ここにある屍の後の姿をとった古い恐ろしい復讐鬼アラストールなのだ。アトレウスの酷い宴席の仕返しに幼児に代わって犠牲を捧げたのだ。

(III) しかしコロスはクリュタイメーストラーの詭弁を認めない。あなたにこの殺人の責任が無いと誰が証言するだろうか。どうして父祖伝来の復讐鬼が手助けなどするものか。

「一族に伝わる」homosporos(1509)血の流れの中に黒い禍アレースが押し迫る、「幼児を
食べる」kouroboros(1512)血糊を目指して。そう反論してふたたびコロスは「蜘蛛の巣の罫」
に掛かった王の悲運を嘆く。

クリュタイメーストラーは王が不名誉に謀殺されたことよりも、彼が先に謀みによって
家に禍アーテーをもたらしたことの方に力点を置く。家の若枝である「大きな嘆きの」
polyklautos(1526)娘イーピゲネイアに「あれほどの酷いことをしたその当然の報いを受
けた」のだから、黄泉で「大きな口を叩いて」megalaucheo(1528)欲しくない。「剣で斬り
つけられて」ksiphodeletos(1529)死んだのは、自分が始めた行為の始末をつけたのだ。

(IV) コロスはこの事件がこのまま王妃の勝利で収まらず、一族の争いは次世代に持ち越
されつぎの復讐者が現れるだろうと直感している。心の巧みな配慮を奪われて私は途方に
暮れている。家が倒れようとする時にどこへ向かえばよいのか、「家を揺さぶる」
domosphales(1533)血しぶきの雨が血みどろな嵐となって襲い来ることを私は恐れる。運
命モイラは別な凶行に備えて正義ディケーの刃を研ぎ澄ましている。

おお、大地よわたしを受け入れて欲しかった、「白銀で覆った」argyrotoichos(1539)浴
槽の「臥所に」chameune(1540)倒れ伏す方を見る前に。あの方を葬るのは誰か、悼む者
は誰か。それともあなたが敢えて自分の夫を悼み嘆くのか、偉大な人の魂に「礼儀に外れ
た礼」を示した者が。この優れた方に真実な心で葬礼の辞を述べる者は誰か。

クリュタイメーストラーは答える。お前たちはそれを心配する必要はない、私たちの手
で倒れ、死んだ者は私たちが葬る。彼を悼み嘆くのはこの家ではない、娘のイーピゲネイ
アが「速やかに流れる」okyporos(1557)黄泉の渡し場で喜んで彼を迎えるだろう。

(IV) コロスはこれに対してこの劇の底流をなす「応報の論理」を強調する。咎めに代え
て咎めが返ってくる、争いの決着は付け難い。奪った者は奪われ、殺した者は償いをする。
ゼウスが玉座に在る間はこの定めには変わりがない、「為したものは仕返しを受ける」のが
決まりだ。家の外に呪いの種を投げ棄てるのは誰か、この一族は禍アーテーに膠付けされ
ている。

一族の呪いと報復行為の無限の応酬について言及したコロスに向かってクリュタイメ
ーストラーは今度の行為で悲劇を打ち止めにしたいという希望を述べる。この一族に取り憑
いた神霊ダイモンとは誓約を取り交わし、この家から退去して他の家を「同族の者が手
を下す」authentēs(1573)殺人で疲弊させてもらいたい。私たちは僅かな財産さえ貰える
ならそれで満足だ、この箱から「互いに殺し合う」allelophonos(1576)狂気を取り除くこ

とができるなら。

この緊迫した場面にアイギストスが登場し自分の一家が蒙った積年の恨みを晴らした喜びを露わにするが、この報復行為を実行したのはクリュタイムーストラーであり彼はその陰に隠れていたに過ぎない。正義を振りかざす彼の言い分を巡ってコロスと激しい応酬があり、彼は新たに権力の座に就いた専制君主の本質をさらけ出す。おお「正義をもたらす」dikephoros(1577)喜ばしい日の光よ、今こそやっと言えることができる、人間に「報復を下す」timaoros(1578)神々が天から地上の苦しみを見そなわしているのだと。この男は復讐の女神エリーニュスたちが織り上げた衣に包まれてここに横たわり、己の父親の奸計の償いをした。この国の支配者アトレウスは弟である私の父テュエステースを権力争いの上、家と国から「追放する」andrelato(1586)ことをした。その後弟と仲直りをする振りをして「肉を供する」kreourgos(1592)祝いの席を設け、彼の子供の肉を食膳に供した。そして子供たちの身体の「足の所」poderes(1594)手の先の「櫛の齒のように分かれた」部分は別々に取り分けて置いた。私の父がその肉を食い終わるとアトレウスはその正体を明らかにしたので、父は食べたものを吐き出してこの一族を呪ったのだ。当時は赤子だった私は父と共に追放されたが、成人して正義ディケーが連れ戻したのだ。この男が正義ディケーの張り巡らした罠に掛かって死んだ姿を見た以上は死んでも惜しくはない。

その後コロスとアイギストスとの間に次の様な遣り取りが続く。

コロス：アイギストスが王を「故意に殺害したこと」を認めた上は、裁きディケーにおいて「民衆が投げつける」demorrhiphes(1616)石打の呪いの刑を逃れることはできない。

アイギストス：船の下段の漕ぎ座にいるお前が上座で支配するものにそんな口を利くのか。老人といえども分別を持つことのつらさを思い知らせてやろう。縛めと飢餓が老人の心の優れた「医師また知者」iatromantis(1623)だということをやな。「突き棒を蹴るな」と言うように、蹴れば痛い目めに会うぞ。

コロス：女め、お前は戦いから帰る兵士を待つだけの「留守番役」oikouros(1626)のくせに、勇士の寝床を辱め、將軍たる武人にこのような死を謀ったのだな。

アイギストス：その言葉が泣き声の「源泉」archegenes(1628)になるのだぞ。お前はオルペウスのものとは反対の舌を持っているな。彼は全てを声の楽しみで導くのに、お前はわきまのない吠え声で腹立たせる、だが屈服させられればお前も穏やかになるだろう。

コロス：ではお前はアルゴス人の僭主になる積もりか、この方の破滅を謀みながら「自分の手で殺す」autoktonos(1635)度胸が無かったくせに。

アイギストス：騙し討ちは女のすることと決まっている、私は「古くからの」palaigenes(1637)敵として疑いの目で見られていた。しかし私はこの男の金で市民たちを治めて見せよう。そして「従順に従う」peithanor(1639)ことを拒む者には重い頸木を掛けてやろう。大麦を食わせて「引き綱をつけた」seiraphoros(1640)添え馬のような寛大な扱いはせぬぞ。恐るべき暗黒と飢餓が手を組んで、そいつが従順になるまで見張るだろう。

コロス：ではなぜここに居るこの方をお前自身の怨念で、自ら手を下して殺すことをせず、この国と土地の神々の穢れであるあの女が殺したのだ。多分オレステースさまがどこかで日の光を仰いでおられるだろう。そして運命を味方にここへ戻って来られて、この二人の敵を殺し「大勝利」pankrates(1648)を収められるように。

これに続いてコロスとアイギストスとの口論が頂点に達し、両者はそれぞれの仲間と剣に手を掛けて対決するが、クリュタイメストラが間に分け入って両者をなだめ流血の争いに到ることを防ぐ。アイギストスとクリュタイメストラは自分たちが新たな支配者であることを宣言し、長老のコロスたちはオレステースの帰国と復権に望みを繋ぎ劇の第一部は終わる。

まとめ

『オレスティア』は複雑な構成を持った長大な劇である。三部作は長い時間の経過と広範囲にわたる場所の設定を可能にする構造を持っているが、その第一部『アガ멤ノン』だけで 1673 行という長さを使って王妃クリュタイメストラによる夫殺し即ち国王弑逆という事件を描いている。この主題に沿って事件の動機となった王女イーピゲネイアの犠牲とトロイアの巫女カッサンドラーの死、さらに戦争の発端となったヘレネーとパリスの出奔の物語が挿話となっている。その間にコロスが歌う「ゼウスの讃歌」と「正義の讃歌」が倫理的な考察を掘り下げこの劇の思想性を高めている。そしてこれらの要素が複雑に絡み合う物語の流れを骨太に貫くのが「正義」の思想である。だが争い合う一方からの「正義」の執行は必然的に他方からの「正義」の報復を伴う。この筋立ての視点に基づいたこの劇がどのように展開しているのかを、それぞれの場面の要旨を検討しながら概観してみよう。

プロロゴス (1-39)

陰謀の気配：アルゴスのアガ멤ノンの宮殿の前で見張りの番兵が自分の任務の辛さ

をこぼす。夏も冬も夜露に濡れながらトロイアから勝利の報せを伝える烽火の合図を待ち続けなければならない。しかしこれは「女ながらに男の謀みを図る」王妃の命令によるのだと言い、王宮の中に口外することを許されない陰謀が密かに進行中であることをほのめかす。

パロドス（40-257）

アルゴスの長老たちから成るコロスは不吉な予感を終始表現する。

・出陣の様子（40-103）

懲罰者としての鷲：彼らは十年前にギリシア軍を率いて出陣したアガ멤ノンとメネラーオスの二人の王の勇ましいいでたちを回想する。彼らは雛鳥を奪われて怒る二羽の鷲に、また神々がパリスとトロイアに対して差し向ける懲罰の復讐鬼エリニユスに喩えられる。そしてコロスは自分たちをその壮挙にも加われずに、子供のように頼りない足取りでよるめき歩く昼間の夢幻のような存在だと嘆く。そして都中の神殿や祭壇に奉納されている輝く松明の灯りの意味を問うが、彼らの心の中には不吉な予感や胸を蝕む悲しみが巣くって離れない。

ここでコロスの輪舞と歌のストロフェーが始まり彼らの悲しみと不吉な思いの原因が明らかにされる。

・カルカスの予言（122-159）

鷲の食事：二羽の鷲に喩えられたアトレウス家の王たちではあったが、その出陣に際して不吉な前兆があった。アウリスに集結した軍勢の前に鷲が仔を身籠もった兎を捕らえ、衆目の真中でそれを貪り喰らったのである。そして従軍の予言者カルカスは、この前兆はトロイアの落城を示すがそれには哀れな兎の供食に象徴される犠牲が伴うと占い解いた。それは山野に住む獣や幼獣を保護するアルテミスの怒りを招き、女神が相応の犠牲を要求する。またそれが「男を恐れぬ」謀みをそそのかして、家に住む瞋恚（いかり）が子供の仇を討つからだという。

・「ゼウスの讃歌」（160-184）

ここに物語を中断するような形で「ゼウスの讃歌」が挿入されるが、ここでは人智を遙かに超えたゼウスに勝利を帰し讃える者に真の知恵が与えられると説かれる。どのような権力者であっても尊大なものは滅び、神は「苦しみによる知恵」を授ける。悲しみ苦しみから分別が得られるが、それが神の強制的な恵みである。

・イーピゲネイアの犠牲（185-257）

女神の怒り：カルカスの予言とゼウスの讃歌を前置きにして、コロスはイーピゲネイアの犠牲の様子を語る。女神は逆風を吹き送りギリシア軍の出航を妨げ、その怒りを解くためには王女を犠牲に捧げねばならないと予言者が言う。全軍の指揮官である王は悩み抜いたが、強制の軛を負うことを決断して思慮を棄て大胆不遜な思いに身を任せ、自分の娘を屠る祭司の役を引き受けた。

第1 エペイソディオン（258－354）

烽火の仕組み：クリュタイメーストラは都中に燃える祭壇の灯りについてのコロスの質問に答え、烽火の通信の仕組みを説明する。そしてトロイアの陥落の報せがこの通信によってもたらされたので、それを祝い感謝を神々の祭壇に捧げているのだと説明する。同時に王妃は勝利に傲った自軍が敵国の神々への崇敬も忘れずに不敬の罪を犯さぬように憂慮する。

第1 スタシモン（355－488）

兵士と民衆の死：ゼウスは主客の掟を破ったパリスとトロイアの都に破滅の網を掛け、不敬な者を滅ぼすとコロスは歌う。過度の富に驕り正義の祭壇を足蹴にする者は罰される。ヘレネーはトロイアの都に破滅を婚資として携えて、後に残された夫は魂の抜け殻のようになっている。出征兵士の家には遺骨を納めた壺が送り返され、悲嘆に暮れた人々の恨みはアトレウス家の君たちに向けられる。多数の兵士と民を殺した者を復讐の女神は見過ごしにしない。

第2 エペイソディオン（489－680）

神殿破壊：烽火の報せに疑念を抱くコロスに対して王妃は到着した伝令を示し、伝令はトロイアの陥落と王の帰還を報告する。伝令は王が正義をもたらすゼウスの鶴嘴で敵国を掘り返し、聖壇も神殿も人民も全て滅ぼしたと言い、王妃の懸念は現実のものとなる。帰国途上の王の一行は嵐に遭難し、王の行方が分からなくなる。

第2 スタシモン（681－809）

ヘレネーとパリス：コロスはトロイア戦争に至る経過を回顧し、ヘレネーとパリスはトロイアに破滅をもたらす花嫁と花婿とされる。ヘレネーは人と船と都を滅ぼす女、パリスは不吉な婚姻の全てを滅ぼす嘆きの男と呼ばれる。そしてここで「正義の賛歌」が歌われる。

・「正義の賛歌」（750－781）

富者の驕り：コロスはヘレネーとパリスの無思慮な行動の背後にある富者の傲りについ

て歌う。人間の幸いが大きく育ちすぎると一族に限りない悲惨が生ずるという考えがあるが、本当は不敬の業が不敬を生み、正義を守る家は幸運に恵まれるのである。傲慢は傲慢を生じ、不遜と禍いを産む。しかし正義は貧しくても心正しい敬虔な人の住む家を訪れ、人々を正しい道に導くと。そこにアガメムノーン王が帰国して登場する。

第3 エペイソディオン（810－974）

王の帰還：アガメムノーンはアルゴスと土地の神々に挨拶し、神々が彼に無事な帰国を許しトロイアに正義の裁きを執行したこと、敵の弁明に耳を貸さずイーリオンの破壊の票決をなし給うたことを感謝する。クリュタイメストラは王の無事な帰国を祝い歓迎の挨拶を述べるが、彼女の言葉には偽りの喜びと陰謀の気配が充ち満ちている。その中でも異様なのは、神の嫉みを招かぬかと躊躇う夫を鼓舞してまでも高価な紫布の敷物を歩ませようとする彼女の執拗な態度である。

第3 スタシモン（975－1034）

コロスの不安：王妃が去った後でコロスは王の凱旋を祝う気分とは遠い陰鬱な不安を籠めた歌を唱う。王の帰還を祝おうとしても心はひとりでに復讐の女神の好む挽歌を唱おうとする、ただその不吉な予感が成就しないように願うばかりである。

第4 エペイソディオン（1035－1406）

また登場した王妃は車にただ一人残されたカッサンドラーに向かって、車から降りて王宮の中に入り犠牲式の手伝いをするように命令するが彼女は答えないので、王妃はそれに業を煮やす。

アモイバイオン（1072－1177）

巫女の幻視：王妃が去るとカッサンドラーはやっと口を開き、始めは神が取り憑いたように無意味な叫びを挙げ次第にアトレウス家の呪われた同族殺しの過去と、またこれから王と自分の身に起ころうとする惨劇について神懸かりの状態で見ただけの幻として語り始める。コロスは彼女との問答のうちに王宮の中で進行中の陰謀と、これまで自分たちが恐れてきた不吉な予感との一致に気が付く。

王暗殺：カッサンドラーが王宮の中に入って間もなく中から王の絶叫が聞こえコロスは今まさに王暗殺の陰謀が実行されているのだと知る。驚愕したコロスが善後策を協議しているところにクリュタイメストラが再び登場し、王に正義の刃の一撃を浴びせたことを勝ち誇る。

エクソドス（1406－1673）

王妃の弁明：この場面は王妃とコロスが王暗殺の当否を巡って争う緊迫した遣り取りになる。正統な王を卑怯な手段で暗殺した王妃たちは故国から追放されるだろうと言うコロスに向かって、王妃は自分の娘を家畜のように犠牲に供した男を見逃していた者たちがいまになってそのような脅しを言うのかと反撃する。ついには彼女は家に取り憑く復讐霊が自分の姿を借りて父祖代々にわたる呪いを成就したのだとまで言い募る。コロスはこの呪いが次の世代にまで継承され、報復の応酬が止むときは無いだろうと言う。

報復の予感：ここにアイギストスが現れてついに正義が遂行され父親の無念が晴らされたと喜ぶが、コロスは自分で復讐を実行する勇気も無い男が女の陰に隠れて大きな口を利くと蔑みを露わにする。彼らは成人したオレステースが帰国して彼らを討ち果たすことに望みを繫ぐ。

以上に概観したように『アガメムノーン』はトロイア戦争を背景にしたアトレウス家の悲劇を題材にしている。そしてこの劇には「二様の死」すなわち「無辜の民」と「罪無き者」の死が主軸となって絡み合う。一つは戦争に必然的に伴う「無辜の民の死」であり、その犠牲者には敗者である将兵も含んだトロイアの民衆、そして勝者の側にも少なからざる兵士の死がある。もう一方にはアトレウス家にまつわる呪いの結果としての犠牲者たちである。それは先代の王位争いの渦中で殺された幼い子供たち、そしてこの事件が発端となって一族の中で繰り返される報復行為の犠牲者であり、アガメムノーン王はこの争いが次の世代に持ち越されたために暗殺の対象になった。そしてこの争いはさらに新たな世代に引き継がれることが劇の中で予告されている。

そしてこの「二様の死」の交点に立つのがアガメムノーンなのである。彼はトロイア遠征軍の総指揮官として戦争に伴う犠牲に責任があり、またアトレウス家の直系の王として一族の呪いを身に引き受ける。それ故に彼は「死の責任者」であり、また「死の犠牲者」にもなるという二重の役割をこの劇で演じている。さらに彼は自己の死のみならず自分と行動を共にする者にも死をもたらす。その第一は愛娘イーピゲネイアであり、次に愛妾カッサンドラーである。すなわち「死を与え、死を受ける者」アガメムノーンは、自分の愛する者たちにも死をもたらすのであり、これがこの劇の悲劇性を深めている。

これらの死者を舞台の内外に散りばめながら、詩人は「ゼウスの讃歌」と「正義の賛歌」において二つの命題を提示する。それは「権勢に傲る者もいつかは滅びる」ということと「富貴に傲るものは罰される」という真理である。この表現には傲慢(hybris)というギリ

シア悲劇の重要概念が核心となっているが、この劇ではそれに大胆不遜(*tolma, thrasos*)という概念を加える事ができる。この言葉は特に王妃クリュタイメーストラの性格と行動を表すのに用いられ、この劇独特の使われ方をしている。

さてこの劇の重要な登場人物たちが自己の行動理念に掲げているのは「正義」の思想であるが、人間社会の争いにおいてこれを一方の側が主張するとそれは相手に対する「裁き」となり相手側の「報復」を招く。この因果応報の限りない繰り返しが終わりの無い報復合戦をもたらすのであり、アトレウス家の呪いは正にこの報復の応酬の絶望的な状況を体現している。この報復の呪いを基調にした『オレスティア』三部作の第一部として『アガ멤noon』は「多様な死」の中心人物であるアガ멤noon王に「傲慢不遜」な王妃を対置させた悲劇の舞台を設置しているのである。

コロスの役割はこの二人の圧倒的に強力な個性を発揮する主役の間であって、彼らの背後に控え滅びていく黙せる多数の「罪無き者たち」の存在を観客の意識の上に浮かび上がらせることである。それをコロスは長い旋舞歌によって感情豊かに歌い上げ、その間に劇の主題である思想を二つの讃歌で雄弁に主張する。この複雑で困難な役割を果たしながら見応えのある劇展開を繰り広げるために、詩人は特に意を用いて言葉を選択し詩文を書き上げなければならなかった。その言葉の選択の試みがいま上に概観したような複合語による形容語句の使用であり、舞台の上に背景の人物を直接登場させることなく臨場感のある劇展開を可能にした。これを可能にしたのは、第一章の「複合語の比喩」で述べたように比喩の持つ活写力である。比喩は舞台の外の出来事と人物の心の中の動きを眼に見るように描き出す力を持ちその働きは小道具などの舞台効果に劣らないと筆者は指摘した。複合語がどれほど豊富にまた効果的に使われているかを本文の流れの中で逐一検討してきたが、その使用頻度は特に「アガ멤noon」において顕著である。これはとりもなおさずこの劇の構成が複雑多岐であり、複合語の形容の力を借りなければ表現しきれなかったからだと結論して良いだろう。

I-B-2 『コエーポロイ』

『コエーポロイ』は『オレスティア』三部作の第二部であり、第一部で行われたアガ멤ノン王暗殺に続く王妃暗殺を主題にしている。それは父親の仇を息子が母親に対して報いるという深刻な行為を取り上げ、第三部のオレステース裁判への橋渡しの劇となっている。この劇ではオレステースとエーレクトラーの姉弟が父王の墓前で「正義の裁き」としての報復への決意を高めていく心理的な昂揚の場面に主眼が置かれている。二つの劇をつなぐ中間劇としての役割が与えられているため、この劇の舞台展開は緩慢で動きに乏しいが、その反面登場人物の心情の動きを反映する緊張感に富んだ場面が持続している。

それらは幼いときに別れた姉弟の再会の場面、エーレクトラーが墓詣でに来る原因となった母親の悪夢の内容を描写する場面、そしてこの劇の中心となる父王の墓前において復讐の決意を姉弟の哀悼歌によって盛り上げていき、ついに暗殺を決行するまでの舞台の山場の描写である。また暗殺成功の後でオレステースが自分の行為の正当性を弁明しながらも、すでに己の行為の忌まわしさに気付き復讐霊に怯える場面もこれに含まれる。

これらの重要な場面で劇的効果を高めるために、言葉の表現力にどのような工夫がなされているか、そしてこの複合語による形容語句がどのように意識的に用いられているかを、用例を列挙しながら逐一分析していこう。

本文

プロロゴス(1~21)

舞台はアルゴスの城外、アガ멤ノンの墓所である。そこに今オレステースがピュラデースに伴われて登場する。彼は父王アガ멤ノンが暗殺された時には幼児であったが、姉エーレクトラーの手によって隣国のポーキスの王ストロピオスの許に預けられ、その王子ピュラデースと兄弟のように睦まじく育てられていた。しかし成長したオレステースはアポロンの命により、父の仇を討つべく密かにピュラデースと共に故国に帰り王の墓に詣でる。彼は仇討ちの決意を表明して自分の髪の一房を切り取りそれを墓前に捧げて祈る。

人目を忍ぶ彼はそこに近づいてくる一群の人影を見つけて、あの「共に集う者」homegyrios(10)、「黒い嵐を含んだ、陰鬱な」melanchimos(11)黒衣を纏った女たちは何者だろうかと用心深く観察する。彼はその女たちが墓に詣でるために濯典の壺を携えた王家に仕える侍女であるとすばやく見て取り、その中に喪服に身を包んだ姉エーレクトラーの

姿を見出す。

パロドス(22~83)

王宮の侍女から成るコロスは歌いながら登場する。王の非業の死から永い年月を経ているにも関わらず、悲劇を盛り上げるためにコロスは泣き女の哀悼の仕草をしながらそれを言葉の上でも強調して表現する。

彼女たちは哀悼を示す慣習的な表現として「素早い手の動き」oksycheir(23)で激しく頭を撃ちながら、鋭い爪で顔を搔きむしり「新しく切り拓かれた」neotomos(25)畝のような傷跡を頬に刻みつける。それと同時に身に纏った喪服の「亜麻布を引き裂く」linophthoros(27)音は甲高く響いて彼女たちの悲しみを更に高め、この場面を暗い色と鋭い音で効果的に強調する。

コロスは自分たちがここに墓詣でにやって来た事情を手短に説明する。それは恐ろしい「髪の毛も逆立つ」orthothriks(32)鋭い叫び声が真夜中に館中に響いたからであった。その叫び声はクリュタイメーストラーが悪夢にうなされて発した叫び声であるが、館に仕える「夢占い師」oneiromantis(33)はそれは非業の死を遂げた死者の霊が地下で怒りをたぎらせるからであると占い解く。その怒りは恐怖の叫び声となって奥部屋にこだまし、「時ならぬ夜の間」aoronyktos(34)侍女たちの部屋にまで押し寄せてくるのであった。

コロスは王妃の気休めに過ぎないこの参詣が、本当は死者の慰めにならないことを充分承知している。問題は王暗殺の犯行の後で、王妃が共謀者である愛人アイギストスを王宮に引き入れて不法に権力を掌握していることにある。彼女たちは王家の「惨めさ限りない」panoizys(49)炉端の惨状を嘆き、館全体が「人々に忌み嫌われる」brotostyges(51)暗黒に覆われていると嘆く。

先王が健在であったときには王家に対する敬意が人々の心を占めていたが、今や恐怖が支配し身の安全を図ることだけが皆の関心事となってしまった。正義の女神は姿を隠し、刑罰の怖れだけが世を支配する。人を殺めて流した血は大地がそれを呑み込んだ以上は浄めることは不可能であり、その血は報復を求めて止まない。その犯人が責めを負い破滅がその身を病で「完全に満たす」panarketas(69)まで彼を追いつめる。普通の罪業には何らかの救済の手段があるが、花嫁の座を汚した者と殺人で「手を穢す」cheromysses(73)罪を犯したものに対しては、その穢れを浄める手段は残されていない。

第1 エペイソディオーン（84～305）

登場したエーレクトラーはコロスに向かって父王の墓の前で祈るべき言葉を相談する。死せる王の怒りを宥めて母の恐怖を鎮めるべきか、それともただ黙って規定どおりに「大地が飲み干す」gapotos(97)灌典の水を注いで去るべきかと。するとコロスの長は味方する者に恵みを祈るように勧める。すなわちアイギストスたちを憎み王の最期を思い浮かべて、神か人の誰かが現れる様に祈れと勧める。それに対してエーレクトラーはそれは「裁きを為す者」dikastes(120)かそれとも「正義をもたらす」dikephoros(120)復讐者かと尋ねるが、コロスの長は「殺人に対して殺人で返す者」hostis antapoktanein(121)と明言するように教える。その祈りが神々への敬虔に悖ることではないかとためらう彼女に、コロスは悪に対して悪を酬いるのだから良いではないかと反論する。

この問答には『オレスティア』全体の中心思想である「正義」の解釈が集約されている。すなわちギリシア語の「正義dike」には「裁き、罰、懲罰」の意味が含まれているが、それが人間の手によって執行される時には「報復、復讐」の行為となるからである。だからエーレクトラーがコロスの勧めを受けて、神々に「名誉を与える者（裁き手、復讐者）」timaoros(149)としてオレステースを遣わしてくれるように祈るときには、それは「裁き手、復讐者」としての弟の帰還を願っていることになる。

彼女たちは王の墓の前で声を揃えて歌い、神々と大地と「勝利をもたらす」nikephoros(148)正義の助けを求め、「槍の剛の者」dorysthenes(159)が現れ、「反り返った」palintonos(161)スキュティアの弓を使うアレースと共に、「柄まで貫く一本造りの剣」autokopos(163)を揮って敵を討ってくれるように祈る。

「大地が飲み干す」gapotos(164)灌典の儀式を行ったエーレクトラーはここで墓の上に供えられているものに気が付き、コロスも「心が恐れに踊る」(166)思いがする。それは髪の毛の一房を切って供えたものであり、そのようなことは墓の主の近親者にふさわしい行為である。またそれはよく見ると「帯を深く締めた」bathyzonos(169)女性のものではなく、「同じ鳥の羽根」homopteros(174)の色をしており、エーレクトラーの髪によく似た色をした房毛である。そこまで観察すると彼女はオレステースが報復者として帰還し、その決意の証としてこの房毛を父王の墓に捧げたのではないかと推量する。彼女は自分の願いがやっと神々に聞き届けられたのだと思い歓喜の涙に暮れるが、さらにそれが懐かしい弟の

ものかどうか思い悩み、「心が二つに分かれ」diphrontis(196)千々に乱れて判断に迷う。

するとそこへオレステースがピュラデースを伴って物陰から現れ、自分こそエーレクトラが復讐の「成就をもたらす」telesphoros(212)者を遣わすようにと今しがたまで神々に祈っていたその目的を実行する者であるという。余所者が罫を仕掛けていたのではないかと疑う彼女に対して、オレステースは我と我が身に「奸計を凝らす」mechanorrhapho(221)のようなことをしても無益であるとそれを否定し、その証拠として墓に供えてある房毛と辺りに残っている「足跡を調べる」ichnoskopo(227)のように言う。弟を逃げ延びさせた時に身に着けてやった手製の織物を目にして、やっと彼の言葉を信じる気になったエーレクトラは歓喜に包まれてゼウスに祈る。

永年待ち侘びていた弟が遅く成人して帰って来てくれた今こそ、父祖の家を回復する希望が現実のものになり、喜びの涙に霞んだ彼女の目には四つの顔が重なって見える。亡くなった父王の顔と、憎まれても「全く当然な」pandikos(241)母親のものと、哀れにも犠牲に捧げられて死んだ「共に蒔かれた」homosporos(242)姉イーピゲネイアの面影が浮かび上がり、それらが眼前にいるオレステースのものと一体になる。彼女は待ち望んだ報復の成功を願い「権力 Kratos」、「正義 Dike」と「ゼウス」の三位の神格の助けを求める

エーレクトラと思いがけぬ場所で再会したオレステースは、父祖の家を再興すべく姉と声を合わせてゼウスに祈る。この場面では詩人は父を奪われた姉弟の境遇を巧みに比喻を用いて強調する。彼らはまるで「毒蛇に父鷲を殺された雛鳥」(247)のような立場にあり、「父を喪った」patrosteres(253)二人は家から追い出されて頼るべきあても無い。ゼウスの祭司でもあった王家がもし断絶するならば、今後誰が神の祭壇に「牡牛を犠牲に捧げる」bouthytos(261)盛大な儀式を執り行い、神の尊厳を讃えるだろうか。倒れた家を神々が守り育てて再び過去の栄光を取り戻させてくれるように彼らは求める。しかし傍らに控えたコロスは、姉弟が激情に走るあまりに警戒心を忘れることがないように警告し、彼らを迫害する権力者たちが熔ける「(瀝青)松脂に煽られて」pisseres(268)燃え熾る炎に焼かれればよいとまでいう。

その注意に対してオレステースは自分が「限りない力を持つ」megasthenes(269)アポローンのお告げに従って行動していることを明らかにする。もし自分がその命令に従わなければ逆に恐ろしい罰を受け、家と財産を失い、牡牛の姿に変えられ、業病に取り付かれ復讐の女神に追い回される。復讐の女神はここでは流された肉親の血に対する義務を怠る者

を「青銅を鍛えた」chalkelatos(290)筈で撃って苦しめる。彼は狂気や悪夢に悩まされ、あらゆる交際を断たれ、祭儀に加わる事も「灌典の儀式の楽しみに」philospondos(292)加わることも許されないで社会からの「追放者」にされるのだと彼は言う。

コンモス（哀悼歌）（306～478）

この劇の中心部分を成すのは、父王の墓前で姉弟が報復の誓いを立て、彼らとコロスが交互に神々の加護を祈り求めて歌い上げる哀悼歌（コンモス）の部分であるが、この172行に及ぶ長大な場面に複合語の比喩が集中して用いられていることは注目に値する。この場面ではまずコロスの長が哀悼の口火を切るとオレステース、コロス、エーレクトラーの順にそれを受けて歌うという構成になっている。この構成は四回繰り返されそれぞれの哀悼と嘆きのテーマは異なるが、比喩的な表現力に満ちた修飾語が豊富に使われている。

(I) まずコロスの長は一家に伝わる一連の同族殺しの悲劇を想起させる。それはアトレウス、アガメムノーン、オレステースの「三代の昔から伝わる」trigeron(314)三度繰り返された悲劇であるが、この悲劇にはわが子らを殺されたテュエステースとその遺児アイギストスの怨念も絡み合っている。正義の女神は「憎悪の言葉には憎悪の言葉」(310)で負債を償わせ、「血の一撃には血の一撃が」(312)「(悪の)行為には(悪の)行為を以て」drasanti pathein(313)報いが為されると、この劇の中心思想である「応報の掟」をコロスの長が高々と唱える。これはあたかも彼女自身が正義の女神の化身となったかのような印象を与える。

この「正義の裁き」としての「報復行為の正当性」が宣言された後でオレステースとエーレクトラーはそれぞれコロスと歌を交わし、「惨めな父」ainopater(315)の非業の死の様を嘆く。彼らは自分たちの置かれている「涙多き」polydakrytos(333)屈辱に満ちた状況を述べ、「二人の子供」dipais(334)が災いから救われ破滅を逃れられるように父の霊に訴える。

(II) 現在の悲惨のみを強調する二人に対して、コロスの長は将来の明るい希望を述べて彼らを励ます。彼らが目的を果たしたときには墓前の哀歌に代わって勝利の讃歌が家中に響き、新しい酒を作るように「新たに加えられた」neokras(344)友を喜び迎える事になるだろうと。

しかしオレステースは父が戦士として戦場で生命を落としたのではなく、故国で妻の手

による不名誉な死に方をしたことを悼む。もし王がトロイアにおいて敵の手に掛かり「槍に貫かれた」*doritmetos*(347)名誉の死を遂げたとしても、彼の地に「堆く積み上げられた」*polychostos*(351)塚が築かれ、残された家族の悲しみも軽減されたことだろうという。それにコロスも同意して王が戦場で華々しく討ち死にしていたなら、地下においても戦友たちに「畏れ敬われる」*semnotimos*(357)君主として迎えられ、「人々を説き伏せる」*peisibrotos*(362)王笏を以て人々を治めていた生前のように振る舞うことが出来ただろうと嘆く。

だが父王がトロイアの戦場で虚しく「槍に斃れた」*dourikmes*(365)兵士に混じって異境の土となることをエーレクトラーが願うはずがなく、彼女はむしろ父を暗殺した者たちがそのような「死をもたらす(運命)」*thanatephoros*(369)運命を迎えていたら良かったと言う。

(III) コロスの長は姉弟二人が墓の前で身体を叩きなが送った二重の鞭打ちの響きは既に地下の霊に届き、彼らは今や復讐の時や遅しと待ち構えていると励ます。

それを受けてオレステースは「遅れて報復をなす」*hysteropoinos*(383)破滅の女神が地下から遣わされて、「あらゆる非道を行う者」*panourgos*(384)の上に懲罰が下されるように祈る。コロスも悪事を犯した男と女が滅び行く様を目の当たりに見て皆が勝利を祝う日のくることを願い、「心の舐先の前方から鋭い怒りが吹き付けてくる、憤りに満ちた憎しみが」(390-2)と豊かな比喻を用いて歌う。エーレクトラーもゼウスが早く正義を執行してくれるように、大地の女神ガイアと地下の神々に祈る。

(IV) コロスの長は殺された者の血が大地を染めた時には、それが報復の血を求めるのが掟であり、殺人行為は必ず復讐の女神を呼ぶと説く。オレステースは地下の支配者たち、死者たちの「力に溢れた強力な」*polykrates*(406)呪いに王家の嫡子である自分の窮状を訴える。コロスもそれに唱和して絶望と苦悩の間に心が揺れ動く様を歌い、エーレクトラーは苦境のさなかで自分がまるで狼のように「残忍な心」*omophon*(421)になり、「母親から受け継いだ気性は和らげようがない」と嘆く。

(V) ここまではコロスの長が一つの主題を提唱すると、それに続いてオレステース、コロス、エーレクトラーの順に哀悼を繰り返してきたが、これ以後はコロスとエーレクトラー、

コロスとオレステースの組み合わせで哀悼を反復しこの長大なコンモスを終わる。

ここでふたたびコロスは伝統的な泣き女の仕草に戻り激しく胸を叩きながら悲しみを表す。その表現にはいくつかの読み方の異同がある。コロスは「歯を固く食いしぼり」aprigdoplektos [H.L-Jones](425)嘆きながら拳を「絶え間無く」apriktoplektos [Lachmann](425)打ち下ろして胸を撃ち、「血にまみれた手で」polypalaktos [Bothe](425)手当たり次第に「隈無く」polyplanetos [Hermann](425)「休むことなく」epassyterotribes(426)身体を打つ。その結果彼女たちの頭は傷つき乱れて「この上もなく惨めな」panathlios(428)様子になるのである。

コロスの哀悼歌に続いてエーレクトラーも母を「厚顔無恥な、大胆極まる」pantolmos(430)女だと非難しその手に掛かった父の悲運を嘆く。オレステースも父親に対する母親の「不名誉な」atimos(434)「非礼な態度」atimosis(435)を責め、神々の助けにより自らの手によって母を滅ぼした後は死んでも良いと言う。コロスはさらに王殺害の後で死者の祟りを封じるために手足を切り取りそれを腋の下に縛り付ける呪術(maschalismos[maschale, armpit])が王に対して行われたことを想起させ、姉弟の憤激を煽り復讐の決意を新たに固めさせる。またエーレクトラーは自分が館の中で「人に害をなす」polysines(446)性悪な犬のように奥部屋に閉じこめられて、悲嘆の「涙をおびただしく流し」polydakrys(449)ながら、ひとり孤独に耐えて来た様子を語る。

悲嘆と激情が頂点に達したこの場面に至って、コロスは二人に不屈の精神で対決の場に臨むように励ます。コロスが率先して「皆の(声を)合わせて」pankoinos(458)目的の成就を父の霊に祈る。オレステースは「戦いの神アレースと戦いの神アレースが対決し正義の神ディケーが正義の神ディケーと戦うのだ」(461)と宣言し、エーレクトラーは「正義に基づいて」endikos(467)神々が成就することを望み、コロスは「運命の定め」morsimon(464)を信じて祈る。

一族にまつわる「押し止める術もない」dyskatapaustos(470)責め苦には限りが無いが、その家が負っている傷の唯一の治療法は外に求める事は出来ず一族の中での「酷い血まみれの争い」(474)以外に道は無いとコロスは言う。

父王の墓前で繰り広げられたこの長大な哀悼歌は、このように姉弟とコロスの間で悲嘆を反復しながら、「血の報復」によって「正義の裁き」を行うという悲劇の主題へと舞台を盛り上げていくのである。

第2エピソード（479～584）

姉弟は再び墓の前に立って今度は韻律を伴わない平常の言葉遣いで父の霊に援けを求めて呼び掛ける。オレステースは目的を果たした暁には死者の仲間に恥じない立派な葬礼を捧げると約束をし、エーレクトラーは自分のための「相続遺産すべて」pankleria(486)の中から婚資を割いて葬礼の襖ぎの費用に差し出すと誓う。二人は改めて「大地の女神ガイア」と「冥界の女王ペルセーパッサ」に助力を求め「正義の女神」を味方として遣わすように祈る。

ここでオレステースは、なぜ今になって思い出したように死者の霊に捧げ物を供えて祈る気になったのかと、墓参りを思い立った動機をコロスに問い質す。するとコロスの長はそれは「夜に出没する」nyktoplanktos(524)恐怖が原因であると説明する。王妃は「生まれたばかりの」neogenes(530)蛇の子の夢を見たこと、そして彼女がその蛇の子に乳を含ませたときに胸を咬まれて恐怖の叫び声を上げたのだという。そして死者の怒りを鎮めるために供物を捧げさせるための使者として、自分たちが遣わされたのであるとコロスは説明する。

オレステースはそれを聞いてこれこそ正しく自分たちの「願いを叶える」telesphoros(541)正夢であると悟った。その蛇の子こそはオレステースであり、クリュタイメーストラーは自分が生んで養い育てた我が子の手で殺される事をその夢は告げているのだと彼は占い解く。自分たちもその「前兆を占う」teraskopos(551)夢判断に同意するとコロスは言う。

オレステースは父王を騙し討ちにした犯人どもを毘に掛けるための復讐計画を明かす。それはアポローンの立てた筋書に従う計画でもあった。彼自身は「あらゆるものを詰めた」panteles(560)袋を担ぎ旅人の身なりをして、王家とも古い誼のある「槍の盟友」doryksenos(562)ストロピオスの息子ピュラデースを伴い王宮を訪れる。彼らは隣国人のふりをしてポーキス訛りで案内を請うてみるつもりだが、「扉を守る」thyroros(565)門番は彼らを怪しみ中に入れてくれないだろう。しかしそのうちにアイギストスに出会う機会ができたときには「足取りも速やかな」podokes(576)剣を鞘走らせて奴を討ち取ってやろう。復讐の女神は流血には飽いていても必ずこの計画は実行してみせるから、エーレクトラーは先に家の中に入り「膠で固定したように」artikollos(580)万事がいささかの手違いも無く運ぶように気をつけていてくれるように。彼自身はアポローンが「剣を手にする」ksiphephoros(584)果たし合いを見守り、勝利を授けてくれるように祈るだけであると言う。

第1 スタシモン（歌舞）（585～651）

スタシモンは人間の世界の事象についての一般的な考察や感慨をコロスが代表して述べながら歌い踊る場面であり、旋舞歌ストロフェーと反旋舞歌アンティストロフェーとは歌の韻律も内容も対をなしている。ここでは四組の旋舞歌が長い詩を織りなして、女性の心を狂わせ恐ろしい行為に走らせる愛欲エロースの力について述べている。

(I) まずコロスは「地の上を歩き回る」pedobamon(591)野獣や海中に棲み人間を攻撃する怪物たち、また雷電や嵐などの天地の異象など人間を脅かすこの世の様々な苦しみを列挙する。そしてそれにも増して恐るべきは「並はずれて大胆な」hypertolmos(594)男の野心であり、「無謀な tlemon」女たちの心に潜む「大胆不敵な」pantolmos(597)女の愛欲である。それは野獣でも人間でも「住まいを共にする」homaulia(598)伴侶を、「女を支配する」thelykrates(599)愛なき愛によって破滅させる。

(II) 思慮分別が軽薄でない人々は、アルタイアーの例を教訓にすべきである。彼女は狩りの獲物を巡る争いで自分の兄弟を殺した我が子に復讐しようとするあまり、「我が子を滅ぼそうとして」paidolymas(604)、彼の霊が宿る生命の木片を「燃え盛る火」pyrdaetis(606)に投ずる謀みを計画し、「運命（の女神）に定められた」moirokrantos(611)彼の生涯の終わりの日の到来を早めてしまった。

またメガラ女王ニーソスの娘スキュラの場合も同じである。彼女はメガラ攻略中のクレタの王ミーノスの「黄金造りの」chrysokmetos(617)首飾りに惑わされ、父王の頭から神聖な無敵の力を宿す髪の毛を抜き取った。「犬の心をした」kynophron(621)恥知らずの娘スキュラはこうして自国の敗戦を招き父に死をもたらし、その所業を憎む敵将によって自らも滅ぼされた。

(III) またさらに忌まわしいのが一家を滅ぼす呪わしい婚姻の話である。「女が企む」gynaikoboulos(626)陰謀が夫に対して仕組まれ、「武具を身に装う」teuchesphoros(627)武勇の誉れ高い將軍を滅ぼしてしまう。情熱の火で焦がされることがない炉端、女性の「無謀な心意気とは無縁な慎ましき」atolmos aichme(630)こそ尊いのだ。

しかしそれらにも増して悲惨なのがレームノスの女たちの物語りである。彼女たちはア

プロディーテーの罰を受けて夫たちから遠ざけられたために、憤って島の男たちを皆殺しにし、「神々も厭う」theostygetos(635)この忌まわしい行為のために彼女たちは人間の世界から消えてしまった。神々の憎む行為を讃える者は誰もいない。

(IV) だから「鋭く尖った」oksypeukes(640)刃を犯人の脇腹に突き立てることも「正義に基づく」diai dikas(641)行為であり、ゼウスが定めた権威を地に倒すのは、掟に悖る仕業である。正義の女神の基盤には揺るぎがなく、運命の女神は「剣を鍛えて」phasganourgos(647)報復の時に備えている。悪事を働いた犯人たちに対しては「深く思慮をめぐらす」byssophon(651)復讐の女神エリーニュースたちは、胸奥に謀りごとを企み決行の時を待っている。

このようにコロスは正義の掟を高々と歌い上げて、女性を迷わせ「大胆不遜な」凶行に走らせるエロスとその行為に報復することが「正義の女神」の意志を執行することであると確認しながら劇の本題に入る準備をする。

第3エピソード(652～782)

ここにオレステースがピュラデースを伴って登場し門番に案内を乞う。自分は重大な報せを携えて来た者であるが、客人をもてなし「誰でも迎え入れる」pandokos(662)家を尋ね求めているのである。誰か館の「すべてを取り仕切る方」telesphoros(663)、あるいはこの「所を治める」toparchos(664)女主人にお会いしたいが、出来たら男のご主人のほうが話がしやすいのでそちらに取り次いで欲しいと頼む。

そこにクリュタイメーストラーが現れてオレステースをただの旅人であると思い、彼に一夜の宿を提供しようと申し出る。オレステースは自分たちはポーキスの国から「自分の荷物を自分で担いで」autophortos(675)旅をして、この国を目指し「脚を気ままに解き放ち」lapezygen podas(675)この土地を目指してやって来た者であると身元をあきらかにし、その国の王ストロピオスからの伝言を述べる。王は「非常に忠実に」pandikos(681)正確無比に伝えよと断って、オレステースがもはやこの世に居ないことをその親に報せるように命じたという。彼らが携えているのは青銅の壺に収めたその遺骨であった。この報せを聞いたクリュタイメーストラーは自分が「惨め極まる」panathlios(695)存在であると言って嘆く。夫の死後わざわざその姉妹の嫁ぎ先に預けてまで難を避けさせた愛児も館に伝わる「呪いの女神アラー」(692)の狙い過たぬ征矢を逃れる事は出来なかった。

息子への希望がこの家に伝わる狂気の癒し手であったのにその希望も今となっては潰えてしまったと彼女は言う。このような不幸を報せる用件で訪問した非礼を詫げるオレステースを宥めてクリュタイムストラは、「後に付き従う」opisthopous(713)旅の伴の者も一緒に中に入るようにとピュラデースにも声を掛ける。復讐決行の時まで声を発することはしないが、このように彼は影のようにオレステースの背後に常に寄り添っている。コロスは王宮のなかに入って行く彼らを見送りながら今こそ時が熟したと悟り、「艦隊の司令官」nauarchos(723)であるアガメムノーンの遺骸を抱く大地の女神と墳墓を守る女神の助力を求める。また決戦の場である王宮で敵を欺くために謀りごとをめぐらす「説得の女神ペイトー」と「黄泉の神ヘルメース」が彼らの「剣による果たし合い」ksiphodeletos(729)を見守るように祈る。

しばらくして王宮の中から乳母のキリッサが泣きながら駆け出してくる。乳母は幼い時から苦勞して育て上げたオレステースが異国で死んだという報せを聞いて気も動転している。彼女はアイギストスと呼んでくるようにという命令を受けているが、それは「新たに伝えられた」neangeltos(736)便りを彼に直接に聞かせるためである。その報せを聞けばきっと彼は他人の手前「沈み込んだ(不機嫌な)顔つき」skythropos(738)を装って見せるだろうが、それは内心の喜びを隠すためであると乳母には察しが付く。しかしこのことは館ととりわけ乳母にとっては「この上なく不幸な」pankakos(740)報せなのである。彼女は幼いオレステースを母親から預かって育て上げた苦勞をひとしきり述べ立てる。赤ん坊は時を選ばず「夜中でも急き立てて」nyktiplanktos(751)泣き叫び、お腹が空いたり喉が渇いたり「尿意を催す(赤子のオレステース)」lipsouria(756)たびにその世話を要求して喚く。また新生児の腹具合は「意のままにならず」autarkes(757)自分勝手に気ままに動く。そのような要求になんでも応えて「手先の器用な」cheironaksia(761)乳母は仕事を巧みに捌いてこなしてきた。しかしそのように大切に育ててきたオレステースが亡くなったことを伝える悲しい任務がいま与えられている。

このように取り乱している乳母にコロスの長は、アイギストスが急いで「一人でやって来る」monostibes(768)ように、「槍を携える」doryphoros(769)従者を引き連れずに来るように仕向けるための策を乳母に授ける。まだ館の希望が潰えた訳ではないというコロスの言葉の真意を乳母は測りかねたが、その勧めを受け入れて言いつけを果たすために急いで出かける。

第2スタシモン（歌舞）（783～832）

(I) コロスは対決の場を目前に控えて今度はオリュムポスの神ゼウスに正義の裁きを求め、裁き手のオレステースを敵の面前に励まして進ませるように求める。そうすれば彼はそれに倍する「返礼」palimpoinos(793)を敵への仕返しと報復に添えて神に捧げるであろうと誓う。オレステースは苦難の車に繋がれた仔馬が、任務を果たしてその軀から解き放たれると言う比喩で表現される。

(II) またコロスは家の奥深く「富を誇る」ploutogathes(801)豪華な部屋に住まう館の守り神に祈り、家代々に伝わる流血の呪いが新たな血の裁きによって償われ、家がふたたび陽の光を仰ぐことができるように願う。コロスはまた地下の神ヘルメースが正義に助力し、仇討ちの陰謀を首尾良く成就させて家の繁栄が取り戻されるように願う。

(III) 時が到りこの家が解放されるならば、「繁栄を吹き送る順風の」ouriostates(821)ようにコロスは破滅が去り幸いの到来を寿ぐ歌を唱和するだろう。決戦の刃を揮う時が来たら「我が子よ」と叫ぶ母親の嘆願の声に耳を貸さず、「父の報いだ」と叫び返してペルセウスがゴルゴーンを退治したときのように、決然として鋭い刃を敵の胸に突き立てるのだとオレステースを励ます。

第4エペイソディオン（833～934）

ここにアイギストスが登場する。彼は自分が望んでもいないのにオレステースの死の報せをもたらしたという旅人の身許に疑いを持ち、その真偽のほどを調べるために急いで来た。その報せは「先の殺人の傷口が膿んでまだ疼いている」(843)一家にとって血のように「恐怖が滴る」deimatostages(842)苦難である。それが「日の目を見て（生きて）いる真実の」(844)報せか、それとも「高く中空に跳ね上がってもすぐに虚しく死に絶える」(846)女たちの噂話に過ぎないのかどうか確認しようとして彼は来たのである。ここでは自分を仇敵と狙う者の情報について、平静を装いながらも関心を抱かざるを得ない彼の内心の不安を豊富な比喩を巧みに使いながら表している。

王宮の中に入っていくアイギストスを見送って、コロスはオレステースに勝利を授け給えとゼウスに祈る。いまこそ「人を切り裂く」androdaiktos(860)刃が血塗られようとしている。アガメムノーンの家が永久に破滅するか、自由の炎と光を取り戻し「都を治める」

polissonomos(864)支配権を回復するかが決まろうとしている。

すると突然館の中からアイギストスの絶叫が聞こえ、家僕が走り出てくる。「ああ、ひどい悲しみ！」panoimoi(875)、主人が討たれてしまったと彼は叫ぶ。そしてクリュタイメーストラーの首も剃刀の刃に掛かり正義の一撃で落とされようとしていると言う。

そこに当のクリュタイメーストラーが登場し、危険を察知すると自分の手で決着を付けようとして「男を切り殪す」androkmes(889)戦斧を持ってこいと気丈に命ずる。アイギストスの亡骸を見つけて取り纏る彼女の許にオレステースがやって来て彼女を殺そうとするが、彼女は胸をはだけて母親の自分を殺さぬように嘆願する。すると今まで影のように付き添いながら沈黙を守っていたピュラデースが始めて口を開き、それでは「ピュートーのお告げ」pythochrestos(901)はどうなるのかと逡巡するオレステースに決断を迫る。この場面はピュラデースの口を借りて、アポロンが母親殺しの決行を迫るのだとも解釈されている。

その言葉に気を取り直したオレステースは、母親をアイギストスの遺骸の傍らに連れて行き愛人と死を共にするように言う。「父を殺して」patroktono(909)おきながら息子と共に暮らすことはできない、運命が定めで父を殺したのなら母もまた運命に従って死なねばならないと彼は言う。幼い自分を生家から追い出して棄てたではないかと非難するオレステースに向かって、クリュタイメーストラーは息子の安全を配慮して「槍の盟友」doryksenos(914)であるストロピオスに預けたのだと弁解する。しかしその弁明を聞きいれずに飽くまでも懲罰の刃をかざす息子に向かい、彼女は「母親の呪い」(912)を口にして「母の怒りの犬」(924)に用心するように脅す。ついに彼女は夢に見た蛇がオレステースであり、それを育てたのは自分であったことを悟る。その母親をオレステースは父親のように死ねと言って剣に掛ける。

コロスの長は二重の悲運が一家を襲い多くの流血を経て悲劇が終結に向かうのを見て、「家の眼」(934)にも等しい存在のオレステースが「完全な破滅」panolethros(934)を迎える事がないようにと祈願する。

第3スタシモン（歌舞）（935～971）

(I) コロスはこの度の悲劇を回想する。事の始まりはパリスによるヘレネー誘拐であり、「手厳しい懲罰を下す」barydikos(936)正義の女神は厳しくプリアモスの一族を罰した。しかしその報復戦争において勝利を得たアガ멤ノーンは帰国して陰謀の刃にかかり、嫡

子オレステースは故国を逃れて復讐の機会を窺う。そして彼が成人したいまや友人のピュラデースを伴って、「二重の獅子、二重の軍神アレース」(938)の姿になって帰国した。彼らは「ピュートーの予言者アポローン」pythochrestos(940)の託宣を奉じて罪に穢れた二人の敵を倒した。この秘密裏に行われた復讐劇を実行したのはゼウスの子「欺きに満ちた心」doliophron(947)を持つ正義の女神であり、敵に怒りを注ぎ全き破滅をもたらした。

(II) パルナッソスの地の奥に住まうアポローンが声を挙げ、「謀みによらぬ謀みで」(955)王家を覆う根深い災いに立ち向かい、「天空を統べる支配」ouranouchos(960)が地にも及ぶようにした。家は重い「隷従の鎖」(962)から解き放たれて日の光を仰ぎ、「大地に倒れ伏す」chamaipetes(964)ことを止める。いまや「全てを成就する」panteles(965)「時」が館を訪れ、穢れが浄められる。骰子のように「麗しく美しい面を向けて伏せて」euprosopokoites(969)いた幸いは面を上げて、この家に住まう人々にその柔和な表情を見せてくれるだろう。

エクソドス(972~1076)

オレステースは彼が手に掛けた二体の遺骸と共に登場し、自分の行為が正義の裁きであることを強調する。彼ら二人は「父を殺して」patroktonos(974)家を乗っ取った篡奪者であり、犯罪を犯すときも死ぬときも運命を共にすると誓い合った仲であるが、いまそのとおりにここに寄り添って死んでいる。彼はそう言って彼らの犯罪の証拠として父が謀殺されたときの罫の仕掛け、縛め、足枷を証拠として示す。さらに浴場で王の身体をくるみその身動きの自由を封じた母親の手作りの衣を、裁きの場での証人になるようにと白日の下に曝す。

アイギストスは父の名誉を損なった当然の裁きを受けたのであり、クリュタイメーストラは自分の夫に対してこのような行為を企んだ罰をその子供から受けたのである。このような女は「触れるだけで身体が腐る海蛇か毒蛇」(994)と呼ぶべきか、その「奔放な正義に悖る心根」(996)は恐るべきものだ、と言って彼は改めて暗殺に使った浴衣を示す。これは獣を捕らえる罫かそれとも屍体を「足首まで包む」podendytos(998)覆いか、魚を漁る網あるいは狩網か。しかしそのような仕掛けは「金銭を奪う」argyrosteres(1002)ことを生業とする盗賊にこそ必要なものであり、彼は多数の人を殺して「自分の心を暖めようとする」(1004)だろうが、そのような謀みをする女とは同じ家には住めない。

しかしオレステースの仇討ちで一族の苦難に最終的な解決はもたらされる筈がないことをコロスの長は鋭敏に感じ取り、討ち果たされた者たちも哀れだが、残された者にも「苦難が花開く」(1009)と感慨を述べる。

「為した者は仕返しを受ける」という主題を念頭に置いて、王妃である母がああ暗殺をしたのか為さなかったのか(1010)という問いへの答えはこれだと、またオレステースは浴衣を掲げて見せる。「父を殺した」patroktonos(1015)織物を染めた血の跡が犯行を物語るが、また同時にそれは彼の勝利そのものも忌まわしい血の穢れをもたらすことを想起させる。

コロスの長は再び「言葉を話す人間」の誰も無疵で憂いの無い生涯を送ることは叶わず、苦難が直ちに引き続いてやって来ると言う。

オレステースも自分を待ち受けているのは勝利の栄光ではなく、新たな苦難の道が控えていることを知っている。自分のすることはすべて騎手が「手綱を取って」heniostropho(1022)車を操るときに走路を外れて脇へと逸れて行くようなものだ、今も心の抑制が利かず「恐怖が怒りで踊ろうとしている」(1024-25)と言う。既に彼は母親殺しの罪と穢れにより、自分が狂気に取り憑かれることを自覚しており、まだ理性を保っている間に友人たちに伝えておくと断ってこう主張する。母親殺しは正義に反する行為ではない、「父を殺した」patroktonos(1028)穢れと神々の憎悪の対象を取り除いたのだから。

自分の行動は「ピュートーの予言者」pythomantis(1030)アポロンの神託に基づくもので責任はすべて神にあり、神の命に背いた場合の罰は口に出来ぬほどに恐ろしいものである。しかし神の命令に従った場合も肉親の血を流した罪の故に国を追われ、他家の炉端に立寄ることも許されず、他人との交わりは断ち切られる。そこで自分はこれからデルフォイにある「大地の臍なる社」mesomphalos(1036)に赴き、アポロンの聖なる石にすがって神の庇護を嘆願しようという覚悟を述べる。

コロスの長はこのオレステースの言葉を聞いて、アルゴスに自由をもたらした彼が悪い噂に屈してはならない、「二匹の大蛇の頭を易々と打ち落として」(1047)勝利を得たのだからと励ます。

しかし既にオレステースの内心の目にはゴルゴーンのように「黒い衣をまとい」phaiochiton(1049)蛇を身にまつわり付かせたエリーニューエスが、彼を追及すべく姿を現したのが見えている。コロスはそれが彼にだけ見える「幻影」doxa(1051)に過ぎないと打ち消すが、彼はそれが錯覚ではなく「母の怨恨の犬」(1054)が彼を悩ますのだと断言する。

コロスはそれが新しく流された血のなせる業でありアポローンの浄めを受ければ消えると論ずるが、彼は「お前たちにはこれが見えなくても、自分には見えるのだ」(1061)と叫びながら逃げるように退場する。

コロスは王家を襲う三度目の大嵐もこれで終わりを告げたと歌う。最初の災厄は「子供を食す」paidoboros(1068)テュエステースが原因となり、二度目は「軍勢を率いる」polemarchos(1072)将軍アガメムノーンが「湯殿で斬り殺された」loutrodaiktos(1071)暗殺事件である。そして三度目は王家の「救い主」soter(1073)と成るべくして現れたオレステースが「破滅」moros(1074)に陥る結果を迎える。この「災厄の力」menos ates(1075)は一体いずこで終わり眠りに就くのかとコロスが慨嘆して劇の第二部は終わる。

まとめ

『コエーポロイ』は『オレスティア』三部作の第二部の劇である。アイスキュロスは三部作という長大な劇構成を用いて、アトレウス家の三代にわたる悲劇を巧みに描き出している。アトレウス家の悲劇は第一の世代がアトレウスとテュエステースの王位を巡る兄弟の争いと、その諍いの和解を装った晩餐においてアトレウスが弟にその子らの肉を食膳に供した事件からこの一族の呪われた惨劇が始まる。第二世代の悲劇は事件を危うく免れたテュエステースの子アイギストスがアトレウスの子アガメムノーン王の遠征中に王妃クリュタイメストラに近づきその愛人となって帰還した王を謀殺する。第三世代の悲劇はこの謀殺から隣国に逃れたオレステースが成人して故国に帰り、父王の墓前で参詣にきた姉エーレクトラーと再会し、母クリュタイメストラとその愛人アイギストスを討ち果たす物語である。

この三つの殺人事件の中で第一のものは兄王が弟の子供を殺してそれを実の父親に騙して食べさせるという事件で、陰惨さにおいては極まりないが復讐劇としての悲劇性は他に比べて弱い。第二の事件は長女を出陣の儀式に犠牲として奪われた怨みに加えて永い間の夫の留守の孤独につけ込まれた王妃が引き起こした暗殺事件であり、これも復讐劇としては深刻さは強くない。しかし第三世代がかかわる事件は、オレステースとエーレクトラーの姉弟が父の仇を実の母に対して報いる話であり、悲劇性においてこの上なく深刻である。

この復讐劇に倫理上の難点があることは事件を起こす前から当事者には十分に自覚されているのである。だから姉弟共に自分たちの置かれている状況を必要以上に惨めで絶望的に強調し表現している。母親の弁解に従えば、オレステースを事件に巻き込むことを恐れ

た彼女が王の盟友ストロピオスの許に委託して安全に養育させたのであり、エーレクトラーも王宮内の奥深くに侍女に守らせていたと理解することも可能である。それを一途に王家の嫡流としての権利を奪われたと僻んだ彼らが、恨みを果たし復権を狙って密かに謀議を凝らし、母親殺しという第三の悲劇を引き起こしたのだとも解釈できる。

この劇の底流を貫くのはアトレウス家に伝わる呪いである。これは「為したものは仕返しを受ける」という古来の掟に基づく「血の報復」であり、殺人に対してはその被害者の近親者が報復の義務を負うという慣わしである。この義務に従えば暗殺された父の仇を討つことには姉弟の側に十分な倫理上の根拠がある。しかしその報復の対象を母親に向け、哀願する母を自らの手で刃に掛けることにどれほどの正当性があるかという疑問がここに大きく立ちはだかってくる。この疑問を表面に出さないために、彼らは劇の冒頭から母の立場を一顧もせず、父の恨みを晴らすことだけをを念頭に置いているが、その視点に立てば彼らが父の墓前で復讐の誓いを確認するという舞台設定はまことに当を得ている。

この視点から劇の構成と各場面で述べられる「報復の正義」の思想を検討してみる。

・プロロゴス：(1-21)

アルゴスの城外にあるアガメムノン王の墓所。密かに帰国したオレステースがピュラデースと共に登場して、父の仇を討つ決意を表明してその証として自分の髪の毛を一房墓前に捧げる。彼らはそこに登場した黒衣の女性たちの一団を見て物陰に隠れる。

・パロドス(22-83)

エーレクトラーが侍女たちから成るコロスを引き連れて登場。コロスは「泣き女」の所作を繰り返して墓の前で激しい哀悼の表現をしながら、自分たちがそこに遣わされた理由を明らかにする。それは非業の最期を遂げた死者の霊が夜毎に王妃の眠りを妨げるからであり、死者の怒りを宥めるために灌典の儀式を行おうとしているのである。

・第一エペイソディオ(84-305)

エーレクトラーとコロスは王の墓の前で祈るべき言葉を相談し、「正義の裁きをもたらす者」すなわち「殺人に対して殺人で返す者」の出現を願うことになる。そこでオレステースが現れて自分こそ彼女たちが求めていた目的を「成就する者」であるといって身許を明らかにし、姉弟は再会を喜び合う。

・コンモス(306-478)

父王の墓前で姉弟とコロスが繰り返す長大な哀悼歌の中で、彼らは一族に伝わる同族殺

しの呪いを想起して「血には血を以て報いる」という「応報の掟」を高らかに宣言する。ここでは「血の報復」の行為が「正義の裁き」であるという原則が哀悼歌を反復する過程で強く確認される。

・第二エペイソディオン（479－584）

姉弟は墓前で改めて母が見た蛇の子に自分の胸を咬まれたという悪夢の意味を検討し、それは母が自分の育てた我が子によって殺されることを示す正夢であると占い解き、その夢が現実のものとなるように復讐計画を立てて父の霊に助けを求める。

・第一スタシモン（585－651）

いよいよ実現しようとする復讐の決行に向けて、コロスは女性を不遜な行為に駆りたてる愛欲の力についてアルタイアー、スキュラ、レムノスの女たちの例を挙げて歌う。こういう行為は神々の憎むものであり、「大胆不遜な」凶行に及ぶ女を罰するのは「正義の女神」の意志を執行することであるという思想が述べられる。

・第三エペイソディオン（652－782）

オレステースがピュラデースと共に自分の死を報告する旅人を装って登場し、王宮に入り込むことに成功する。敵を欺く「説得の女神ペイトー」と「黄泉の神ヘルメース」の奸計が成功し、クリュタイメストラは息子が死んだものと信じ込み、乳母は赤子の時代から王子を養育した苦勞が無駄になったと嘆く。

・第二スタシモン（783－832）

コロスは対決を前にしてゼウスに正義の裁きを求め、オレステースをその執行者とするように願う。そしてその裁きの決行においては、母親の命乞いにも耳を貸さず決然と正義の刃を揮うようにオレステースを励まし、家の守り神とヘルメースの助力を乞い、館が以前のような繁栄を取り戻すことを祈る。

・第四エペイソディオン（833－934）

アイギストスが登場し、旅人の情報を自分の耳で確かめて仇と付け狙われる不安から逃れようとするが反対に討ち果たされ、駆けつけたクリュタイメストラにも刃が突きつけられる。胸をはだけて命乞いをする母親を前に躊躇うオレステースに対し、ピュラデースは「アポローンのお告げ」を思い起こさせ励まして仇討ちを遂行させる。

・第3スタシモン（935－971）

仇討ちの成功を見てコロスは一家の同族殺しを回想する。プリアモスの一族も、アガメムノンの殺害者もゼウスの子である「正義の女神」の裁きを受けて滅び、ゼウスの正義は

執行され天空の支配が地にも及んだ。この報復を命じたのはゼウスの子アポローンであり、実行したのはゼウスの子軍神アレスの役割を演じる二人の若者であった。

・エクソドス（972-1076）

オレステースは殺した二人の遺骸を前にして自分の行為がいかに「正義に叶う」ものであるかを説明しようとする。浴室における王暗殺の証拠として血にまみれた浴衣と刃の跡を示して「母親殺しの正当性」を力説するが、「為した者は仕返される」という「血の掟」を主張すればするほどその論理が自分に返って来ることを意識せざるを得ない。そしてその弁明の最中に早くも彼は「母親殺しを」責めるエリニュエスの幻影をみて怯え狂乱するのである。

以上に概観したように『コエーポロイ』は『オレスティア』三部作の第二作にあたり、アガ멤ノン暗殺からオレステースの裁判に至る悲劇の中間の過程を示している。第一部ではトロイア戦争から帰還したアガ멤ノン王が、王妃クリュタイメストラとその愛人アイギストスの謀みに掛かって暗殺された。第二部では王の遺児オレステースが成人して帰国し、姉エレクトラーと共謀して王暗殺の下手人たちを殺すが、この暗殺の首謀者が彼らの母親であることが問題を複雑にしている。母親が父親を殺した場合は子供はどちらに対する義務を果たすべきかと言う難問に直面した彼ら、いやその難問を提示した作者は、第二部においては一方的に父親の側の論理のみを正面に掲げ、母親側の論理は隅に追いやるのである。

だからこの劇は主な舞台を王の墓所に設定し、冒頭から王の悲運と姉弟の置かれた逆境を嘆き悲しむ哀悼に重点を置く。父と子の哀れな運命を強調すればその復権を妨げている者への憤激が高まるからである。そして「正義」の裁きへの要求は父親の立場からのみ声高に叫ばれ、その義務はアポローンの命令として宣言されている。この命令に従わない時は家財産を失って追放されるのみならず、業病に苦しめられて世間との交わりも断たれる(269-305)。肉親の血を流した者に報復する義務を怠るときに受ける罰は、肉親の血を流した者が受ける罰に等しいのである。この二律背反の義務を負ってオレステースはまず父親への義務を果たすべく報復の実行に踏み切る。

父への報復行為が生みの母を手には掛けることになるというおぞましい現実におレステースが直面するのは、彼が抜き放った剣を正に母に突き立てようとして母が胸をはだけて命乞いをした時である。幼い時に別れて以来記憶に無い母親が眼前で嘆願する姿にたじろぐ

彼を励ますのは、親友ピュラデースの形を借りて父への義務を迫るアポローンの叱声である。しかし心を奮い立たせて彼が突き立てた刃が迷らせ流出させたのは母親の濃厚な「肉親の血」であった。こうして彼は「父への義務」を忠実に果たした結果として「母親の呪い」を受け「母の怒りの犬」(924)であるエリーニュスたちの追及を受けることになった。

父親側の立場を代弁するアポローンと母親側の立場を代弁するエリーニュスたちの論争は第三部『エウメニデス』において演じられる。ここではオレステースは論争する両者の間で受動的に弁論する被告の立場に身を置いている。しかし第二部では彼は神の命令と社会の掟に縛られてはいるが、まだ主体的に自覚的に行動する人間として描かれている。この行動する人間としての彼を突き動かすのが、父王の墓の前で慟哭し哀悼するエーレクトラーと侍女たちの嘆きの姿である。第二部の大半がこの墓前の哀悼の場面に費やされているのはこのためであり、それ故にこの哀悼の感情描写には比喩が効果的に用いられている。「コエーポロイ」には他の作品よりも複合語の形容語句による比喩が途切れずに満遍なく続いているが、これらの語句が持つ豊かな表現力を詩人は好んで意識的に用いていると結論してよいだろう。

I - B - 3 『エウメニデス』

『エウメニデス』は『オレスティア』の第三部であり、アテーナイにおけるオレステースの裁判が中心になる。これまで舞台の外の出来事、あるいは登場人物の内心の心象風景として語られていた神々の世界が現実のものとして舞台に上せられ、比喩でしか表現し切れなかった情景が眼前に展開されるのである。デルポイ神域の情景、オレステースが経巡ってきた苦難の旅路は依然として口頭で報告されるだけであるが、アテーナイ市のアレイオス・パゴスに設定された法廷にはアポローン、エウメニデス、アテーナーという神格がアテーナイ市民とまったく同等に目に見える形の登場人物となって現前する。そしてそれぞれの立場で、あるいはオレステースを弁護しまた彼を訴追する。そしてアテーナー女神は、自分が生みの母親を持たないという一方的な理由からオレステースの母殺しを免訴する立場に回るのである。

これは自然な人間的な感情と常識から言っても、当時の観客に受け入れられる解決方法ではありえない。むしろそのような不自然な手段を講じてまでも訴えかけたかった詩人の思想がこの舞台展開の前提となっていたのだろうと考える。それは正義の執行を個人の手から取り上げて、公共の司法の権威に委ねるべきであるという詩人の主張である。これは都市国家内部の争いに止まらず、急を告げる国家間の政治情勢をも色濃く反映している。そのメッセージがどのように比喩という表現方法を用い演劇の手法を通じて観客に伝えられたらどうか、それを舞台の展開を追って場景ごとに検討していこう。

本文

プロロゴス(1-142)

劇の冒頭ではオレステースはデルポイの神託所に母親殺しの罪の浄めを求める嘆願者として座っている。神殿に奉仕する巫女はこの場所はガイア、テミス、ポイベーに次いでアポローンの神託所となったとその由来を語る。この古い由緒ある神託所の初代の主神は「最初の預言者、巫女」protomantis(2)と呼ばれる。アポローンは誕生の地デーロス島を離れて「船が繁く訪れる」nauporos(10)アテーナイの港に着き、パルナッソスの麓の神託所に来た。アテーナイの市民はこの神託所を崇拜し、その地まで神を送り「道を造る者」keleuthopoi(13)となり、その地の民と王デルポスは大いに神に「名誉を与え、敬意を払い」timalfeo(15)出迎えた。巫女はこのように神託所の来歴を語り、アポローン、アテー

ナー、「小鳥の好む」philornis(29)洞窟に祀られたダイモンたちに祈り神託を伺うために神殿の中に入っていく。

程なくして巫女は慌てふためきながら出てくると、たった今恐ろしい者を見て腰が抜けたために「足の速さ」podokeia(37)を用いることも成らず、手で這って逃げてきたと語る。それは神殿の中心にある聖なるオムパロスの石の傍に「神に忌まれた」theomuses(40)男が座っているのを巫女が見たからであった。その男の様子は「抜いたばかりの剣」neosphages(42)を血の滴る手に掲げて、他方には樹の梢に「高く生えた」hypsigenetos(43)オリーブの小枝に嘆願の徴の毛房を巻き付けたものを持っていた。そしてその男の前には見るも「忌まわしい姿をした」bdelyktropos(52)怪物たちが眠りこけていたという。巫女はこの場の收拾を「大いなる力の」megasthenes(61)神であり、「医師にして予言者」iatromantis(62)また「前兆を観る」teraskopos(62)神であるアポローンに任せて立ち去る。

ここでアポローンが神殿の奥から登場して、嘆願者オレステースをどこまでも守り抜く決意を述べる。肉親の血を流した犯人を追求する復讐の女神たちは「旅人に踏み均らされた」planostibes(76)土地をさまようオレステースを地の果てまでも追求するだろうが、この「牛を追う」boukoleo(78)にも等しい苦役の旅にひるんではならないと神は励ます。オレステースはそれに対してアポローンの救いの約束は「保証金」pherengyos(87)のように確実なものだと信じていると答える。そこでアポローンは傍らに控えているヘルメースに「同胞の弟よ」autadelphos(89)と呼びかけてオレステースの道中を守るように頼む。

そこにクリュタイメーストラの亡霊が登場し、祭壇の前で眠りこけているエリーニュエスを叩き起こしてその怠慢をなじる。「母親殺し」metroktonos(102)の息子の手にかかって死んだ自分のために神々の誰も怒りを覚えることなく、「夜の厳かな」nyuktisemnos(108)宴の儀式を捧げてまで尽くした復讐の女神たちは任務を忘れて眠り惚けている。その間にオレステースは追い立てられた子鹿のように「仕掛けた罠」arkystaton(112)の中から逃げ出して、女神らを大いに「冷笑し嘲けりながら」enkatillopto(113)行ってしまったと彼女は憤る。

パロドス(143-178)

アポローンの神殿の中でクリュタイメーストラの霊によって不注意をなじられた復讐の女神エリーニュエスはようやく目を覚ましオレステースに逃げられてしまったことを知って悔しがらる。彼女らはアポローンが新参の神でありながら、古えの女神の職分を侮り、

「母を打ち殺した」metraloias(153)男をかばって逃がしてやったと言って神を責める。それはあたかも夢の中で聞く非難の声のようであり、「二輪馬車を駆る御者」diphrelatos(156)が鞭の「真ん中を持って」mesolabes(157)自分を打つように聞こえてくる。

アポローンの聖所は肉親の血を流した男が入ったために穢れ、聖なるオムパロスの石は「血潮を滴らしている」phonolibes(164)。アポローンは預言の神でありながら自分の聖所を「自ら招き寄せた」autosyptos(170)「自ら呼び求めた」autokletos(170)穢れでけがしてしまった。それによって「古くから伝わる」palaigenes(172)定めであるモイラを破滅させてしまったのである。

第1 エペイソディオン(179-234)

アポローンが再び現れ、不浄な復讐霊に神聖な神殿から立ち去るように命じ、従わねば神の持つ「黄金造りの」chryselatos(182)弓弦から放たれた矢で射られるだろうと脅す。復讐の女神たちが居るのにふさわしい場所は、頸を切り「目をえぐり取り（掘り出し）」ophthalmorychos(186)「手足を切り取る」akronia(188)残酷な刑罰の行われる場所、「血を飲み乾す」haimatorrophos(193)ライオンの棲む洞窟である。エリニュースらは聖所を出て、牧人から離れた「家畜の群（飼われるもの）」aipoleo(196)となるように、そのような群れの牧人となる神はどこにもいないのだからとアポローンは言う。

こういうアポローンの非難に対してエリーニュエスはオレステースに「母殺し」metroktono(202)をさせた「全ての責任を負う」panaitios(200)のは神自身であることを念を押して確認する。ここで「母殺し」metraloias(210)の罪を追求するエリーニュエスの職務と、家を重視して夫殺しの罪を糾弾するアポローンの立場とが対比される。エリーニュエスにとっては「親族による」authentēs(212)「同じ血を分けた（肉親の）」homaimos(212)殺人は夫殺しとは別である。しかしアポローンにとっては婚姻の絆を破る夫殺しの罪のほうが重く、その正義 *dike* を執行したオレステースをエリーニュエスが「狩り立てる」andreleto(221)のは筋違いである。だがエリーニュエスは殺された母親の血が導くままにオレステースに対して報復 *dike* を求め、犬のように彼の「足跡を追う」ekkynegeto(231)のである。

第2 エペイソディオン(235-306)

オレステースはデルポイから遠路アテーナイ市にやって来て、今アクロポリスのアテーナー女神の神殿の前に額づいている。オレステースはアポローンの命令によってはるばるアテーナイにまでやって来たのであり、彼はここで女神による罪の裁きを求めている。傷ついた子鹿を捜す猟犬のように彼の跡を追ってきたエリーニュエスは神殿の中で彼を発見し、「母殺し」matrophonos(258, 268)の罪の追求の手を緩めようとはしない。すべてをその心に見張り「記憶の板に書き留めている」del tographos(275)地下の審き手であるハーデースは、エリーニュエスを遣わして彼に償いの血を求めているのである。

しかしその告発に対して、自分の「母殺し」metroktonos(281)の穢れは人々の間で苦難の旅を続けるうちに乾き色褪せ消滅したとオレステースは主張する。また肉親の流血による穢れそのものも、すでにデルポイにおいて「子豚を屠る」choirokeinos(283)正式の儀式によって祓い清められ、その責任はアポローンが引き受けていたのである。リュビアーに生まれ、カルキディケーの野におけるギガンテースとの戦いで勇敢に「軍の指揮を取り」tagouchos(296)、いまはアテーナイ市の守護神として尊崇されているアテーナー女神の庇護をオレステースは求める。エリーニュエスは神々の介入を拒否して、血の贖いを追求する復讐の女神の歌を歌い舞い踊る。

第1スタシモン(307-396)

アテーナー女神の像に縋って救いを求め身の穢れが祓われたと叫ぶオレステースを囲んで、エリーニュエスは殺人者を追求し呪いをかける言葉を唱えつつ舞い始める。彼女たちは古い掟を守る「まっすぐな公正な裁き手」euthydikaïos(312)であり、それを誇りとしている。罪のないものには災いを与えないが、人の血を流した者には容赦ない復讐の神として立ち向かう。殺人者に対してはその「心を乱す」phrenodales(330)歌をうたって取り憑き、その犠牲者を狂気に追いやり破滅させる。運命の女神が定めたように、我と我が手で「親族殺人」autourgia(336)を行った者を地の底まで追いつめてその「心を損なう」phrenodales(343)のがその任務である。彼女たちの職分は天上の神々のものとは異なり、身にまとうものも「真っ白な」palleukos(352)衣とは縁がなく、「血の滴る」haimostages(365)姿を「忌まわしいもの」aksiomisos(365)と見なされ、「黒装束の姿」melaneimon(370)で神々の集いの場から追放されている。

復讐の女神たちの任務は罪人に跳びかかり高みから「重く落ちてくる」barypeses(373)足先を振り下ろし蹴りつけることである。「すばしこく走る者」tanydromos(375)であって

も足元をふらつかせて耐え難い破滅を加えてやるのだ。しかし愚かな人間は最後の瞬間まで自分の運命に気がつかず、没落する人々の暗黒の霧に包まれたような悲運の様は人々の「嘆息に満ちた」 polystonos(380)言葉が語り伝えるだけである。

このように人間にとっては宥め難く、神々からも「分け隔てられた」 dichostato(386) エリーニュエスの職分は生者にも死者にも等しく「険しい難儀な道」 dysodopaipalos(387)を辿って遂行されるのである。「運命が成就し」 moirokrantos(392)神々が与えた完全無欠なこの掟を女神が語れば、それを聞いて恐れないものはどこにもいないだろう。このようにエリーニュエスは恐るべき正義の復讐の掟を述べつつ、表現豊かな形容と比喩の歌を伴う舞を見せる。

第3 エペイソディオオン(397-489)

嘆願するオレステースの祈りを聞きつけて、遙かトロイアーの地からアテーナー女神は神殿に駆けつける。女神はトロイア戦争でアカイアの將軍たちから「槍で獲得した」 aichmalotos(400)戦利品としてトロイアの地を与えられ、女神の「全き支配地」 autopremnos(401)としてそこに降臨していたのであった。アテーナーは自分の神殿の中に嘆願者のみならず彼を追求する復讐の女神の群れを見て驚く。神々とは異なった姿を見咎められたエリーニュエスは、自分たちが夜の娘で呪いと呼ばれるものであり、「人を殺す」 brotoktoneo(421)罪を犯した者を追い立てるのが務めであることを明かす。

まずアテーナー女神は公正な裁き手としてオレステースの犯した罪の事情を聴取しようとするが、エリーニュエスは彼が自分で判断して進んで母親を殺したのであり、「母を殺す」 metroktoneo(427)ように唆す他者の強制(突き棒)が存在したわけではないと彼の責任を問う。オレステースの言い分も聞かねばならないと説くアテーナー女神の公正な裁きを信じて、エリーニュエスは裁決を女神に委ねることに同意する。

アテーナー女神の問いかけに勇気を得たオレステースは、自分の置かれた苦境を説明する。彼はすでにデルポイなどの神域で、まだ「乳を呑んでいる」 neothelos(450)幼い家畜の血を振り掛ける浄めの儀式を済ませた者であり、女神の像に縋っても神像を穢す怖れはないと言う。そして自分がギリシアの「船乗り」 naubates(456)の長であり、トロイア戦争の功労者であるアガ멤ノーンの息子であることを明らかにする。

父親はトロイアから勝利を得て凱旋したが、「黒い心を持った」 kelainophron(459)母親の悪企みにかかり、浴場で狩網に包み込まれて暗殺された。母親殺しはその父の死に対す

る仇討ちであり、これはアポローンの神託に基づく行為だから神も共に責任を負っている。だから彼の行為が正当であるかどうか、女神に全てを委ねるから裁決してほしいと彼は懇願する。

アテーナー女神はそれを受けて答える。このような争いの裁きは死すべき人間たちにとっては重すぎる仕事であるが、女神自身にとっても「鋭い怒りを招く」*oksymenitos*(472)殺人の裁きをすることはその任務として定められていない。オレステースも禊ぎを受けて、穢れ無き嘆願者として頼ってきた以上その願いを拒否できないが、エリーニュエスたちの任務も宥め鎮め難い。復讐の女神たちがこの仕事で「勝利をもたらす」*nikephoros*(477)結果を得られなければ、その憤懣からこの地に病毒がもたらされるだろう。だからこの争いの審き手として非の打ち所のない市民を選び出し事件を裁いてもらい、その審理手順をこのような殺人事件を裁くときの公的制度として定め将来にわたって尊重しよう。このようにアテーナー女神は双方を説得して退場する。

第2 スタシモン(490-565)

オレステースはすでに殺人のための血の穢れは宗教的な儀式によって祓い清められていたので、こんどはアテーナー女神の権威に基づく市民の手による裁判によって無罪の判決を求めているのであるが、その嘆願が古の掟を守るエリーニュエスの権威と抵触するのである。女神たちは改めて自分たちの復讐の掟を強調して歌い踊る。

オレステースの「母殺し」*metroktonos*(493)が正義に基づく行為と見なされるなら、古い掟は新しい掟によって取って代わられる。そうなればあらゆる倫理の基盤が崩され、親たちは「子供が負わせる傷」*paidotrotos*(496)によって苦しめられることになる。エリーニュエスは「人を見守る神」*brotoskopos*(499)であり正義を司る神であるが、不幸に陥った「新しく嘆く」*neopathes*(514)母親がこの神の名を呼び求めても救いは与えられない。驕慢からは不敬の心が生まれるが、健全な心からは「全ての人に愛され」*pamphilos*(536)「皆に慕われる」*polyeuktos* 幸せが生まれる。人は「客人をもてなす」*ksenotimos*(547)心を尊重すべきであり、強制されずに自ら進んで義しい人は「完全に破滅する」*panolethros*(552)ことは決してない。しかし「あらゆる品を取り合わせて」*pantophyrtos*(554)船で運ぶ不義な人が苦難に遭遇し、帆桁が砕かれ大渦に呑み込まれるときに救いを求めてもその不敬な声に神は耳を傾けない。不遜な人は波に溺れ、正義の岩に砕かれて闇に消えていく。

第4 エペイソディオオン(566-777)

舞台はアテーナイ市内のアクロポリスの麓にあるアレイオスパゴスの法廷に変わる。ここは昔アレースがポセイドーンの子ハリロティオスを殺したときに裁かれた岩山の上であり、前508年のクレステネースによる民主改革以後は殺人罪と国家への大罪のみを裁く重罪裁判所として使われていた。以下はその裁判制度の由来を語る縁起物語となっている。

アテーナー女神が裁判官の席に着き、アポローンが被告人オレステースの側の弁護人となって付き添い、エリーニュエスからなるコロスが原告としてアテーナイの市民の代表が陪審員として登場する。始めに弁護側の証人アポローンが立ち、神がオレステースの母殺しの責任を引き受け、その罪を祓い清めたことを証言する。つぎに原告のエリーニュエスがオレステースの母殺しの行為を確認し、その理由を問いただす。オレステースは自分が「抜き放った剣」ksiphoulkos(592)を揮って母の頸を切り「神のお告げ」thesphaton(594)に従って「母殺し」metroktoneo(602)をした事実を認める。

オレステースが母殺しを正当化する理由は母親には「夫を殺し」androktoneo(602)子供の父親を殺すという二重の穢れが取り憑いているからである。しかしエリーニュエスにとっては母と子の「同じ血の」homaimos(605)つながりだけが重要であり、夫と妻の関係は問題ではない。そのため夫を殺した妻の方は咎められず、生みの母を手にかける息子のみが「血に穢れた者」miaiphonos(607)と非難されることになるのである。

アポローンの立場はさらに単純で、その託宣の言葉はすべてゼウスの考えを代弁するものである。アガ멤ノーンは「ゼウスが与えた」diosdotos(626)王笏を持つという「名誉をもたらす」timalpheo(626)地位にあるものである。そのような高貴な生まれの男が女の手にかかって死んだのであるが、それもアマゾンのような戦士の「遠矢を射る」hekebolos(628)弓で討たれたのではなく、妻の卑怯な企みにかかって謀殺されたのである。このような死に方は「大いに尊敬された」pantosemnos(637)将軍、ギリシア軍の「船の引率者」stratelates(637)である指揮官に許されることではない。悲運の父のため正当な仇討ちをした息子を追求する復讐の女神たちは「この上なく忌まわしい怪物」pantomises(644)に他ならない。母親というものは単に「新たに蒔かれた」neosporos(659)胤の養い手に過ぎないからである。

双方のこのような議論の応酬の後にアテーナーは陪審員に投票を命じると同時に、このアレースの丘の由来を説明する。ここはアマゾーンたちがアテーナイの王テーセウスに対

して憤激し「軍を率いて」stratelateo(687)攻め込んだときに、都に直面して「新しい都」neoptolis(687)、すなわち「高い塔屋を持つ」hypsipyrgos(687)砦を築いた場所であった。そのときに軍神アレースに犠牲を捧げたことから、アレースの丘（アレイオスパゴス）と呼ばれるようになった。この場所を今回の裁判を契機として、正義を守る国家の礎たる神聖で「峻厳なる」oksythymos(705)裁きの場として尊ぶようにと女神は命ずる。

このアテーナーの言葉に続いて陪審員が投票を行うがその度にアポローンとエリーニュエスは短い牽制の言葉をやりとりして投票に影響を与えようとする。アポローンはゼウスの命令によって託宣を与えたことを強調し「最初の殺人」protoktonos(718)を犯したイクシーオンの例を引き合いに出すが、エリーニュエスは裁きに負けた時にはこの都に災いを与えると陪審員の市民を脅す。そして最後にアテーナーはオレステースの立場を支持する票を投ずるが、それは自分が母を介さずに父ゼウスのみを親として生まれたからである。そして評決「同数の投票」isopsephos(741)に分かれた場合は、オレステースを無罪放免すると予告しておいて開票させる。

開票の結果同数の票によって無罪と判定されたオレステースは、故国アルゴスとアテーナイとの「永年月にわたる」leisteres(763)友好関係を約束して「誓いを立てる」horkomoteo(764)。死後においても彼は守護者となってこの都を戦乱から守り外的を防ぐと約束する。かれは女神アテーナーとその「都を守る」polissouchos(775)住人とに別れを告げ、国の安全と「勝利をもたらす槍」nikephoros(777)の戦運を祈願して立ち去る。

第3 スタシモン(778-1020)

法廷の場面は終わりアポローンとオレステースが退出するが、後に残されたエリーニュエスは肉親の掟を守る自分たちの職分が無視され侮辱されたことに憤怒を露わにする。その怒りはこの裁きを下した法廷の置かれたアテーナイと陪審員となった市民たちに向けられ、女神たちは病毒と穢れとをこの国に流し続けようと呪う。アテーナー女神は彼女たちを宥めようとして言葉巧みに説得を続け、古い復讐の女神の職分からアテーナイの都市の守り神としての新しい役割を彼女たちに引き受けさせようとして努力する。以下にアテーナーとエリーニュエスとの歌の遣り取りが反復して続く。

票決に破れたエリーニュエスは自分たちの古い権威と名誉ある職分が否定されたことに憤怒の形相も凄まじく怒りと呪いの声を挙げる。人間どもに辱められた自分たちはこの国に対して「深い恨み」barykotos(780)を抱き、土地を不毛にし、病毒を流行させ「人間を

滅ぼす」brotophthoros(787)穢れを国中に放つだろう。夜の女神の不幸な娘たちが名誉を踏みにじられ「不名誉を蒙って悲しむ」atimopenthes(792)この嘆きの声を聞けと歌う。

このように憤り嘆くエリーニュエスに対してアテーナー女神は、今回の裁きであり「深く嘆き」barystonos(794)憤らないで和解に応ずるように呼びかける。無罪の判決はアテーナーの一票を加えて「同数の投票」isopsephos(795)に割れた結果であり、それは古い部族社会の掟を変えて新しい市民社会にふさわしい法の秩序に基づいた判決であった。アポローンがゼウスの意志を体して神託をオレステースに下し、アテーナーが母子のつながりを否定までもオレステースの行為を弁護したのは、ひとえに父子の関係に基づく市民社会の法秩序をうち立てようとしたからである。古い権威を否定された復讐の女神に対して怒りを収め、この市民社会を守る新しい役割を演ずるように、もしこの説得を受け入れるなら「全く正当に」pandikos(806)約束をしようとアテーナーは提案する。エリーニュエスは地下に「聖油で光り輝く玉座」liparothronos(806)を与えられ、市民たちから崇拜され「名誉を受ける」timalphea(807)だろうと。

このアテーナーの説得に対してエリーニュエスは再び怒りの嘆きの声を挙げ、「深い恨み」baryukotos(810)を抱き、土地の「人間を滅ぼす」brotophthoros(817)呪いを掛け、自分たちは「不名誉を蒙って悲しむ」atimopenthes(822)と呪詛の歌を繰り返して憤りを露わにする。エリーニュエスの憤激を鎮めようとしてアテーナーは新たな提案をする。それは彼女たちが報復の女神としてではなく、市民の幸福と安寧を守る都市の守護神となって祀られることである。女神たちがこの土地に対する呪いを掛けたりせず、アテーナーと共にこの都市に住み「畏れ敬われる」semnotimos(833)ようになれば、誕生や結婚のような祝いの時に「最良の」akrothinos(834)奉納品を受けよう。このような説得に対してエリーニュエスは「古い知恵を備えた」palaiophron(837)自分たちが蔑まれ卑しめられ、古い名誉が取り上げられたことを嘆くばかりである。

しかしアテーナーは辛抱強くエリーニュエスの説得を続け、彼女たちがこの土地を去って「他部族の」allophylos(851)国に移るよりも、アテーナー女神の聖所の傍らに座所を得て「神に最も愛されている」theophiles(869)この国を共有するように勧める。新しい神と「都に住む」polissouchos(883)人間たちによって冷遇され追放されたと考えてはいけない。この土地の「持ち主となって」gamoros(890)永遠に崇拜されることが可能なのだから。

こういうアテーナー女神の懸命な説得にやっとエリーニュエスも激しい怒りを和らげて耳を傾けるようになる。復讐や呪いの女神としてよりも、繁栄と祝福の女神として敬われ

るようになれとアテーナーはさらに説得を続ける。勝利を祝い、大地の実りと家畜の豊饒に恵まれ、子孫の繁栄を願い祝福し、「草木を手入れする」phitypoimen(911)庭師のように人々を慈しめ。そうすればアテーナーも「戦いの争いで名高い」areiphatos(913)この都の「勝利」astynikos(915)の誉れを損なうことはない。このようなアテーナー女神の説得に頑なな心を和らげたエリーニュエスは、復讐の女神から恵みの女神エウメニデスへと変身することを承知して両者は代わる代わるこの都市の繁栄と平和を祈る祝福を唱える。

ようやく憤りを鎮めアテーナーの説得を受け入れたエリーニュエスは、報復の霊から都市の守護神へと変身する決意を表明し、呪詛に代えて祝福の言葉を述べはじめる。自分たちは「全能の神」pankrates(918)であるゼウスが治めアレースが守るこの都に、ギリシアの神々を祀る「祭壇の護り」rhytibomos(920)としてアテーナーと共に並び立ち、その繁栄を祝福する守護神となるだろうと女神たちは約束する。

その繁栄の内容はこの国土から「樹木を損なう」dendropemon(938)激しい風や「草木の芽生えを摘み取る」ommatosteres(940)酷熱を防ぎ、この土地を銀などの「富を生み出す大地」ploutochthon(947)に変える。エリーニュエスはある人には喜びの人生を他の人には「涙で曇った」amblopos(955)人生を与えるが、これからは「男を殺す」androkmes(956)運命の専横を許さない。乙女たちには「夫を与える androtyches(959)人生を約束し、「母を共有する」matrokasignete(962)運命の女神モイラと共に「正しい褒美」orthonomos(963)を正しい人に分け与える。

このような幸いに恵まれた国土は他の都市国家で猛威を揮っている内乱の災厄を免れ、市民たちが心を一つにして「共に愛し合う」koinophiles(985)精神で結ばれる。このような祝福を約束する女神たちを敬う心から「正しい裁きを下す」orthodikaios(994)都であるという評判が高くなるのだとアテーナーは市民たちに向かって言う。そしてエリーニュエスからエウメニデスへと名を変えた恵みの女神たちをその社に案内する行列の先頭にアテーナー女神自身が立ち、その後にクラナオスの子孫であり「都に住まう」polissouchos(1010)アテーナイ市民たちの列が続く。

エクソドス(1021-1047)

以上のようにアテーナー女神の説得の言葉を受け入れた復讐の女神エリーニュエスは恵みの女神エウメニデスへと役割を変え、アテーナーと市民たちの喜びの声に包まれて退場する。この都市の守護神となることを誓ったエウメニデスの言葉を喜んだアテーナーは、

「光をもたらす」selasphoros(1022)松明の輝く明かりで照らされる行列の先頭に立って女神たちを地下にあるその座所に案内する。それに続く従者はアテーナーの古い木造をまつる宮に仕える巫女たちであり、恵みの女神たちは「紫に染めた」phoinikobaptos(1028)高貴な衣に身を包んで栄誉を讃えられる。

大いなる恵みの女神であり「名誉を重んずる」philotimos(1032)夜の娘たちに従う者たちは「全市民が挙って」pandranei(1038)新しい座所となる社に向かって肅々と進む。この国土に対して恵み深く「まっすぐな心に向け給う」euthyphron(1040)女神たちは、「火が燃えさかる」pyridaptos(1041)松明の明かりに先導されて進んで行く。アテーナー女神の住まう都は「全てを見守る」panoptos(1046)ゼウスと運命の女神モイラに加え、新たに加わった恵みの女神の幸わう国として永遠の繁栄を約束されたのである。

まとめ

筆者はアイスキュロスの比喩の研究に関する論文の中で比喩は舞台の外や登場人物の心の中などのように観客の目には見えない情景の描写をするときに多用され効果を上げていると結論した。『エウメニデス』における複合語の形容詞の用例を調べた上の記述において、アイスキュロスはそれらの形容をどのような場面で多く用いているかを検討しよう。各場面の主題を次に表にしてその用法を考えたい。

プロロゴス：

デルポイにあるアポロンの神託所、巫女によるその由来の説明。

オレステースを守る責任を引き受けるアポロンの約束。

オレステースの追跡を怠るエリーニュエスをクリュタイメストラの亡霊が叱責。

パロドス：

母を殺したオレステースに対して血の報復を呪うエリーニュエスの歌。

第1エペイソディオン：

母殺しの犯人を追求するエリーニュエスと彼を守ろうとするアポロンの論争。

第2エペイソディオン：

アテーナーの像に縋るオレステースとエリーニュエスの論争。

第1スタシモン：

古い血の掟を守るエリーニュエスの尊厳と職分を主張するコロスの歌。

第3エペイソディオン：

オレステースを保護するアテーナー女神とエリーニュエスとの論争。

第2スタシモン：

古い血の掟と秩序を守るエリーニュエスの尊厳と職分を主張するコロスの歌。

第4エペイソディオオン：

アレイオスパゴスの法廷におけるアポローンとエリーニュエスの論争。

(市民の代表による投票。同数の票決。)

オレステースに味方して彼を無罪放免とするアテーナー女神の判決。

第3スタシモン：

票決に破れたエリーニュエスの怒りとそれを宥めるアテーナー女神による説得。

エクソドス：

説得を受け入れてエウメニデスへと変わりアテーナイ市を祝福する女神たちの退場。

上に見るように『エウメニデス』は論争の劇である。母殺しをしたオレステースを巡ってその行為が正義であるか非道であるかを異なる倫理基準をめぐって論争が戦わされる。この倫理基準そのものが対立しているので行為を判定する過程が論争になる。その際に自己の行為が正当であり相手側の追求が不当であることを印象づける議論の表現力が豊かであればその論法がさらに力を持つようになる。その対立点には二つある。ひとつはオレステースの母殺しは人倫の基本を侵す非道極まるものだという主張である。これを印象づけるためにオレステース自身は母の血にまみれた忌まわしい姿で描写され、その罪を追求するエリーニュエスも復讐の悪霊として恐るべき姿で形容される。そして論争の場面においてエリーニュエスは古い掟を守る彼女たちの職分が侵されることが如何に不当であるかを憤怒の声高く繰り返し表現する。

もうひとつはオレステースの行為を正当なものとする立場である。これは家と家長である男性の権威を守るアポローンの主張であり、この観点からも古い血の掟は血腥く忌まわしいものと描写され、その掟を追求する女神たちはいっそう嫌悪すべきものとされる。この両方の観点が組み合わさって、女神たちが憤って歌い踊るスタシモンの場面に複合語の形容が多く使われている。

そしてオレステースの母殺しというひとつの行為を巡る論争は、古い氏族社会の倫理を代表する「血の掟」と、新しい市民社会の倫理を代表する「法による裁き」との対立という様相を取る。この法廷を司るのがアテーナー女神であり女神を守護者として奉ずるアテーナイ市民である。しかしこの市民の代表による投票は同数に分かれ、古い掟と新しい法

の権威が未だ拮抗状態にあることを露呈するが、この均衡を破るのが父親の権威を擁護するアテーナー女神の判決である。ゼウスを父親として母親を持たないとするアテーナーの論法は、メーティスを母とする神話を無視した詩人のこじつけではあるが、父権的なものの考え方が定着していく都市国家における正義のありかたを模索する論法のひとつであるといえよう。そしてアテーナー女神の説得を受け入れたエリーニュエスは、新たな都市国家における守護神の役割を与えられ、新たな正義とその法の守護者として変質していくのである。また複合語による形容語句は陳腐な言い回しを避けるために新奇で生硬な表現に陥る嫌いはあるものの、この緊迫した論争の場面を盛り上げるためには大いに効果があったと結論してよいだろう。